

初期寺院の創建

－ 7世紀前半における仏教寺院の導入－

相原 嘉之

I. はじめに

我が国で初めて建立された、本格的な伽藍をもつ仏教寺院は飛鳥寺（法興寺）¹⁾である。それは飛鳥の中央部にちかい真神原の地であった。それまで原野にちかく、いくつかの建物が建てただけの場所、基壇上に礎石を据え、朱塗りの柱を立て、緑の連子窓、屋根には瓦を葺く、それまで見たことのない異国風の建物が建立された。特に、中央に建てられた五重塔は、天空にまで届くように聳えていたのである。これらの伽藍を目にした当時の人々は、蕃神とも呼ばれる仏教の外来文化と、その圧倒される建築群に感嘆の声をあげたことであろう。

『日本書紀』推古2年（594）2月1日条「皇太子及び大臣に詔して、三宝を興し隆えしむ。是の時に、諸臣連等、各君親の恩の為に、競ひて仏舎を造る。」²⁾とある。推古天皇は皇子や氏族に対して、寺院の建立を推奨し、多くの氏族たちは寺院を建立した。それから30年を経た頃には、畿内を中心に「寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、并て一千三百八十五人有り。」（推古32年（624）9月3日条）と多くの寺院が建立され、そこには1000人を超える僧・尼僧がいたことが判明する。さらに藤原京遷都直前の持統6年（692）9月条には「天下の諸寺をかぞえおよそ五百四十五寺」（『扶桑略記』）と記されている。

このように仏教寺院は、100年余の間に、爆発的に増加する。これは我が国の仏教政策の結果であり、当時、東アジアのスタンダード宗教であった仏教を国策として導入したことを物語る。しかし、仏教の本格導入までには、様々な契機と画期があり、それは寺院の実態を解明することにより、窺うことができる。本格的な伽藍をもつ飛鳥寺以前の「寺」とはどのようなものであったのか？ 飛鳥寺の創建にあたって、東アジア諸国との文化交流はどのようなものであったのか？ 7世紀前半の初期寺院の実態はどうであったのか？ 伽藍配置の変化は何を表現しているのか？ そして、氏寺から国家寺院への変化は何を意味するのか？など、課題は多い。

今回はこの中でも、初期寺院に関わる課題について整理し、7世紀前半（素弁・単弁瓦所用寺院）における仏教寺院の導入過程を、史料と遺跡を中心に検討することにする。

II. 東アジアにおける仏教

ここでは、仏教の誕生から、それが東アジア諸国に如何に伝播し、影響を与えたか、そして、国家形成における仏教政策について概観する。これを踏まえて、我が国における仏教導入について考えてみたい。

インド仏教とその伝播

仏教を開いたガウタマ・シッダールの尊称のひとつである釈迦牟尼（シャーキャ・ムニ）は、「釈迦族の聖者」という意味である。中国では釈尊と訳されている。釈尊はヒマラヤ山麓のカピラヴァストゥを都とする釈迦族の王国の太子として生まれたとされる。西インド由来の言語であるパーリ語で伝えられ、スリランカや東南アジア諸国に広まった「南伝」仏教文献群によると、釈尊は紀元前560年に生まれ、480年代に亡くなったとされる。一方、西域を経て中国で漢訳

された「北伝」仏教文献群によると、生存期間はその100年ほど後のこととする。釈尊が入滅すると火葬され、舍利（遺骨）は8つに分けられ、各地に土を盛り上げた塔が建てられた。舍利とそれを蔵する仏塔は、次第に仏陀（釈尊）と同一視され、崇拜の対象となっていった。入滅後、弟子たちはラージャグリハ（王舎城）に集まり、釈尊が説いた教えを經典としてまとめ、出家者の生活規則である律を確定した。古代インドを統一したアショカ王の時代になると、全インドに宣布され、広がっていく。しかし、100年ほど経て、仏教がインダス川流域を含む西インドまで広がる頃には、律の解釈をめぐる見解の違いがみられ、分派が進んでいく。釈尊の弟子も仏陀になりうることを認めていた最初期の仏教とは異なり、部派仏教は釈尊だけが仏陀とみなし、自分たちは煩惱を断ち切って輪廻から脱することを目標としていた。しかし、紀元前後になると、仏に会って教えを聞き、菩薩として修行を重ね、自らが仏になることを願う經典群がインド各地で生まれた。大乘仏教である。

インド北西地域に広がっていた仏教は、ガンダーラ地域にまで広がるが、さらに北方のイラン系ソグド人が住むソグディアナでは仏教の影響はあまりみられない。この手前で東に転じて、パミール高原を越え、さらにタクラマカン砂漠を避け、その北側（西域北道）と南側（西域南道）の道を東に向かい、万里の長城に沿って河西回廊を南下し、長安・洛陽にまで伝わった。これらは後に「シルクロード」と名付けられるローマ～インド～中央アジア～中国を結ぶ東西交易路だった。インド北西部の諸国家や西域北道・西域南道沿線の諸国家は仏教に熱心で、仏や菩薩に頼る傾向が強く、王族や裕福な信者は石窟を開削して仏像の礼拝堂を造り、壁に絵を描かせ、大がかりな布施をおこなった。また、上記の2ルート以外にも近年では、中東～インド～スリランカ～東南アジア～ベトナム～中国南部の「海のシルクロード」とも呼ばれる南海ルートも注目されている（石井2019・園田2016）。

東アジアにおける仏教政策

初期のインド仏教では、人間の姿をした仏像は作られず、菩提樹や法輪などのシンボルをもって仏陀を表現していた。これに対して、紀元1世紀頃に仏教がガンダーラ地方に伝播し、ギリシャ系の造形美術に接したことにより、岩石による彫刻仏像が作られるようになり、さらに塑像・銅像が造られるようになる。中国仏教では、最初期から金銅仏の偶像が礼拝の対象とされていた。

この仏教が中国に伝わったのは、後漢の時代（1世紀頃）とされ、3世紀初めには山東半島あたりまで広がったと考えられている。そして、民衆から支配者層に至るまでの人々が仏教を熱狂的に信仰しはじめるのは4世紀の東晋・五胡十六国時代からである。この時代、漢民族王朝の西晋が内部抗争で急激に弱体化し、遊牧民族に北中国の支配権を明け渡し、317年には江南に都を遷した。東晋である。しかし、この王朝も100年ほど存続するが、反乱が頻発し、皇帝の権威は低下していく。一方、華北では5つの非漢民族集団による16の国（五胡十六国）が乱立して、抗争が続く。このような混乱した世相の中で、民衆は現世での幸福を期待するすべもなく、来世の幸福を語る仏教に慰めを見いだした。仏教を信奉する民衆が急増すると、為政者たちは仏教信仰に熱心な姿勢をみせ、仏教に向けられる人々のエネルギーを権力に取り込もうとする。五胡十六国の君主はいずれも僧侶をブレンとし、彼らから仏教の教義を教授し、政策について助言を得た。そして、彼らに伽藍を建立し、經典の漢訳を助けたのである。

439年、華北が北魏によって統一されると、二つの王朝が対峙する南北朝時代が始まる。こ

の頃、仏教信仰は、貴族から庶民にまで広がり、寺院に財物を布施するようになり、民衆に影響をもつ僧侶が複数出現した。このような中、南朝では5世紀中頃に、仏教の戒を受ける皇帝が現れる。菩薩戒を受けた皇帝として知られる梁の武帝は、多くの寺院を建立、經典の講説を行い、注釈書を作成した。一方、五胡十六国の時代を制した北魏皇帝は、貴族層や仏教界を凌駕する権力をもったことから、廢仏という強行策にでる。しかし、この廢仏政策も長くは続かず、もはや仏教を無視することはできなかつた。

このように、中国の政治権力に、仏教が深く根ざすと、仏教を熱心に信仰している皇帝に、仏教色を強調した使者を派遣する周辺国が登場する。仏教を積極的に庇護・信仰している皇帝にとっては、その対応は好ましく映り、周辺国側にもメリットがある。『宋書夷蛮伝』訶羅陀国条によると、430年に宋に送った上表文の内容は、仏教用語が多用され、皇帝は三宝を敬い、寺塔を建立する君主であると、中国を理想的な崇仏君主・崇仏国家として称賛し、交易の自由や交易で得た利益が収奪されないように保証することを求めた。このような上表文は、東南アジアの海上交易国や中央アジアの東西交易ルート上に位置する国々で多くみられる。中央アジア・東南アジアなど古くから仏教に触れる機会の多い国々からは、象牙や玉など特殊な素材でできた仏像、サンスクリット語の經典・仏舍利などの聖遺物が献じられる。一方、中国よりも後に仏教を受け入れた国々では、中国で翻訳された仏典や注釈書などを下賜品に求める国もあった。

581年に文帝が隋を建国して、中華を統一する。篡奪政権であった文帝が、民衆の支持を得るために注目したのが、北周が弾圧していた仏教であった。僧侶の出家の許可や寺院・仏像の修理、經典の収集などを積極的に行う。さらに601年から604年の仁寿年間に、隋全土に100基を越える舍利塔を建立した仁寿舍利塔建立事業を行う。これらの仏教興隆事業により、国内を統治していったのである。この舍利塔建立事業は、国外にも影響を与え、高句麗・百濟・新羅の使者が、本国でも舍利を供養したいとして、舍利の下賜を願いでた。

このように、東アジアでの仏教政策は、国家統治の中に組み込まれ、周辺国においても、仏教を共有することで、中国を中心とする東アジア文化圏³⁾における周辺国家としての位置を確立していったのであった(河上2019・窪添2010・藺田2016)。

東アジア周辺諸国への仏教伝来

周辺諸国への仏教伝来についてみると、まず、ベトナムでは、伝承によるとハノイ北西の地に僧侶がやって来て、神秘的な事件を起こしたとされる。帰国する際に靈木を残し、これで神像を彫り、法雲寺など四寺を建立して安置したのが最初の寺院とされる。ただし、これらの年代についての記録はない。5世紀末には交州の仙州山寺に建立されているので、これ以前であろう。

一方、高句麗への仏教伝来は『三国史記』(巻18)によると、小獸林王2年(372)に、前秦の苻堅から、僧侶・仏像・經典が送られたと記す。このとき、仏教を国家的に歓迎し、国民も抵抗をみせなかつた。これは新興の百濟が北上し、度々高句麗と交戦していた国際情勢があり、百濟が南朝の冊封を受けたことから、仏教を伝えてきた前秦と友好関係を結ぶ必要があったからと考えられる。そして、小獸林王5年(375)に肖門寺と伊仏蘭寺を建立したとされ、「海東仏法の始なり」と記されている。これに対して、中国側の史料である『高僧伝』によると、雲始が関中(陝西省)から太元末年(396年頃)に経律をもたらして遼東に至り、10年にわた

り教化に従い、義熙の初（405）頃に関中に還ったという。これを同伝では、「高句驪、聞道の始なり」と評価している。

百済への仏教伝来は『三国史記』（巻24）によると、百済枕流王元年（384）に東晋から僧侶の摩羅難陀が至った時とされている。王はこれを迎え入れ、翌年に仏寺を創建し、10人の僧を得度して住まわせたという。さらに高句麗との交戦の末、都を熊津へと遷すと、527年に梁の年号である「大通」を冠した大通寺を熊津に建立した。大通寺の瓦には南朝系の技術が使用されており、両国間の仏教を介した友好関係を象徴している。

朝鮮三国の中でもっとも遅れて仏教を受容したのが新羅である。『三国史記』（巻4）によると法興王15年（528）条に、梁の使者と僧侶が至ったことを契機に公伝したとし、「肇めて仏法を行ふ」と記す。地理的にも中国から遠い新羅は、朝鮮半島情勢を有利に進めるため、梁と友好関係を構築する必要があり、梁の国教である仏教を公認することで、梁の関心を得ようとしていたのである（河上2019・蘭田2016・李2010）。

我が国における仏教の導入過程

倭国への仏教公伝は、百済の聖明王が仏像と経典を献上したことにはじまる。正史である『日本書紀』ではその年代を欽明13年（552）と記すが、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『元興寺縁起』）『上宮聖徳法王帝説』では戊午年（538）とする。この異なる年代の真偽については、『日本書紀』の記事には、唐の『金光明最勝王経』による文飾があることや、その年紀が末法元年に設定されたと考えられることから、戊午年（538）説が有力視されている（井上1961・吉田2012）。

しかし、仏教は公伝以前に、すでに倭国にもたらされていたと考えられている。5世紀の伝河内国金剛輪寺の画文帯四仏獣鏡には神仙に変わって、仏像の図像が描かれており、顕宗3年には近江の三津首百枝が志賀の草屋において田の泥土で比丘（僧）の形を作ったという説話、6世紀初に後魏孝荘帝の皇子・善正が豊前彦山に来て霊山寺を開いた伝承がある。これらの説話は公伝以前に、仏教が民間レベルで伝来していたことを示している。特に、継体16年（522）に司馬達等が坂田原に草堂を建て、本尊を安置して礼拝した記事（『扶桑略記』欽明13年（552）10月13日条）は、民間でも特に渡来系の人々の間で信仰されていたことが推察される。この記事の年代は、仏教公伝よりも前であるが、司馬達等の時代からは580年代と推定され、干支（60年）を遡った年代を記しているとも考えられる。以下、『日本書紀』を中心に、仏教導入の経緯を記そう。

538年（あるいは552年）に百済から仏像と経典が献じられ、欽明天皇はここで仏教受容の可否について決断を迫られる。そこで臣下に対して、「西蕃の献れる仏の相貌端厳し。全ら未だ曾て有ず。礼ふべきや不や」（欽明13年10月条）と問う。蘇我稲目は西蕃の諸国が皆祀っているのに、我が国だけが祀らないのは如何なものか、として容認。一方、物部尾輿・中臣鎌子は、我が国は天地社稷の百八十神の国であって、他国の神を祀ると、国神の怒りをかうとして反対したのである。そこで、天皇は試みに、蘇我稲目に礼拝することを許し、小墾田の家や向原の家で祀らせた。ところが疫病が流行り、これは蕃神を祀ったせいだとして、物部氏は仏像を難波堀江に投棄、仏堂を焼き払った。ここから崇仏派（蘇我氏）と廃仏派（物部氏）の対立が激化することになる。敏達13年（584）には、百済より弥勒石像と仏像がもたらされた。蘇我馬子がこれをもらい受け、播磨国にいた高句麗僧の恵便を師として、司馬達等の娘・嶋（善

信尼)ら3人を出家させた。そして、邸宅の東に仏殿を造り、弥勒石像を祀った。最初の出家者が、いずれも渡来系の女性であることは興味深い。翌14年には、大野丘(甘檜丘)の北方に塔を建て、前年に得た舍利を納めたことが記されているが、この時に再び疫病が蔓延したことから塔を倒し、仏殿・仏像が焼き払われる。さらに善信尼らも海石榴市で弾圧された。しかし、今度は天皇と物部守屋が病にかかり、仏像を焼いたためとなり、蘇我馬子だけは、仏教を敬うことが許された。これに反発した物部氏と蘇我氏の対立は、武力衝突へと発展していくことになる。蘇我・物部戦争(丁未の役)である。この戦いにおいて、仏に戦勝祈願をした蘇我氏と厩戸皇子は、勝利の暁には仏のために寺塔を建てると約束した。丁未の役で勝利した蘇我氏は法興寺を、厩戸皇子は四天王寺を建立することになる。一方、善信尼らは百済へと渡り、受戒をして、崇峻3年(590)に帰国し、桜井寺に住み、その後の仏教興隆に大きな役割を果たしたという。

このように、仏教公伝以降、その公認の可否について論争が起こり、特に崇仏派の蘇我氏と廃仏派の物部・中臣氏の間で対立が起こり、献上された仏像は一旦蘇我氏に託された。この間、天皇は中立の立場をとる。しかし、疫病の流行などがある度に、廃仏が行われるが、崇仏と廃仏を繰り返すことになる。この時期の仏教施設は居宅で仏を祀る、あるいは、居宅内に仏堂を建てた「捨宅寺院」「草堂寺院」あるいは「道場」などとも呼ばれており、本格的な伽藍をもつ寺院は飛鳥寺まで待たなければならなかった(大脇2010)。

倭国の仏教は、公伝以前に渡来系氏族を中心として、すでに我が国に入っていた。そして、百済から仏像並びに経典等が正式に献上されるが、これまでみたように、天皇は中立の立場であり、崇仏と廃仏を繰り返している。つまり公伝当初から仏教を国策として導入したわけではなかったのである。蘇我氏は「西蕃の諸国、一に皆礼ふ。豊秋日本、豈独り背かやむ」(欽明13年10月条)というように、東アジアではすでにスタンダードな宗教である仏教の重要性の認識はあったものと考えられ、仏教の導入は、東アジア世界参入へのきっかけになると考えていた。しかし、600年の遣隋使をみても、その内容に仏教色はみられない。推古2年(594)の「皇太子及び大臣に詔して、三宝を興し隆えしむ」(推古2年2月1日条)にあるように、その直前に天皇は仏教を公認するものの、東アジア周辺国のように、仏教を政治・国際交渉には利用していない。むしろ、この遣隋使以降に、「篤く三宝を敬え」とする十七条憲法(推古12年(604)4月3日条)や勝鬘経の進講(推古12年(606)7月条)など仏教政策を推進し、合わせて国家体制の確立も図った。推古15年(607)の遣隋使が「日出ずる処の天子より、日没する処の天子に書を致します。」とあるのを、河上麻由子氏は、隋煬帝のことを「菩薩天子」という意味を込めて記したとする(河上2019・河内2012・氣賀澤2012)。本格的伽藍をもつ飛鳥寺の造営は、「各君親の恩の為に、競ひて仏舎を造る」(推古2年2月1日条)とあるように、王権への忠誠・誓約する証として寺院が造営された。この頃に、天皇が仏教を正式に認めたのである。

III. 寺院以前の「寺」

すでにみたように、我が国初の本格伽藍をもつ寺院は、崇峻即位前紀(587)発願の飛鳥寺である。しかし、史料では、飛鳥寺建立以前に「寺」の名称がみられ、さらに仏像を祀る仏殿などが散見される。ここでは、まず史料及び遺跡から窺うことのできる飛鳥寺以前の「寺」⁴⁾について整理する。

史料にみる「寺」

百濟聖明王からもたらされた仏像及び經典等は、王宮ではなく、蘇我稲目に託された。「小墾田の家に安置せまつる」(欽明13年(552)10月条)とあることから、稲目は邸宅である小墾田の家に安置したことがわかる。ただし、その実態は明らかではない。記載内容からみて、仏殿などを新たに建築したのではなく、邸宅の部屋の一隅に仏像を祀ったのであろう。同記事は、これに続けて「向原の家を浄め捨ひて寺とす」とあり、この仏像を向原に移し、向原の家を清めた、あるいは改修して仏像専用の建物にしたことが窺われる。つまり、この時期には、居宅の部屋の一部、あるいは居宅の建物を改修して「仏堂」としていたとみえる。

さらに敏達13年(584)には、蘇我馬子が「仏殿を宅の東の方に経営りて、弥勒の石像を安置せまつる」とあり、槻曲の家の東に仏殿を造ったことがわかる。同様に、「石川の宅にして、仏殿を修治る」ともあり、やはり仏像専用施設(仏殿)を居宅内、あるいは隣接地に建てたことがわかる(敏達13年(584)是歳条)。

これらの建物は、『扶桑略記』欽明13年(552)10月13日条に、坂田原に仏像を安置した「草堂」を建てており、瓦を葺いていない仏堂があったことがわかる。

これに対して、敏達11年(582)には「牟久原の家を楮井に遷す。翌敏達十二年にこれを桜井道場とし」(元興寺縁起)とあり、仏教施設を「道場」と読んでいたこともわかる。「道場」とは仏教修行の場のことである。牟久原の家を楮井に移した翌年に「道場」となったことから、「桜井道場」は仏教施設として建てられた可能性が高い。つまり既存施設の改修ではなく、新築の仏教施設を新たな場所に建てたことになる。さらにこの「桜井道場」は敏達14年(564)2月15日の記事(元興寺縁起)から、「桜井寺」とも呼ばれたと考えられる。

これら仏堂に対して、塔を建てた記事もある。「蘇我大臣馬子宿禰、塔を大野丘の北に起てて、大会の設齋す。即ち達等が前に獲たる舍利を以て、塔の柱頭に蔵む。」(敏達14年2月15日条)。仏堂だけでなく、塔を建立している。舍利を納めていることから、塔本来の意図に即した建築物(規模・構造は不明)があったと推定できる。「大野丘」とは、「甘檜丘」のことで、甘檜丘の北に塔が建っていた。この塔と敏達11年の「桜井道場」との関係は明らかではないが、大野丘北塔が翌月(敏達14年(564)3月30日条)には物部守屋によって倒し、放火されているにもかかわらず、「学問尼善信等、百濟より還りて、桜井寺に住り」(崇峻3年(590)3月条)とあることから、両者は別の場所であろう。大野丘北塔は、同時に仏堂も焼失していることから、この「寺」には、仏堂と塔があったことがわかる。そして、崇峻即位前紀(587)7月条には、七堂伽藍をもつ飛鳥寺を発願、翌年に造営を開始するのである。

このように飛鳥寺以前の仏教施設としての「寺」は「道場」「草堂」「精舎」とも呼ばれ、居宅の一部あるいは仏堂(仏像礼拝用建物)として改修したもので、捨宅寺院とも呼ばれるものであることがわかる。また、少なくとも「坂田原の草堂」とあることから、瓦を葺かない仏堂があったことは間違いない(大脇2010)。この時期、建築様式としては、基壇をもつ礎石・瓦葺建物以外の、掘立柱建築があったことは間違いなく、むしろ、このようなものが多かったであろう。その中でも、桜井寺(道場)は居宅の一部ではなく、居宅の隣接地に仏教施設としての建物を建てたことは、「寺」が独立した仏教施設としての芽生えと理解できる。

さらにこの中でも、「大野丘北塔」は塔と仏殿があることがわかるが、これは本格伽藍の寺院へ展開する過渡期との位置づけがなされる。しかし、これらの「寺」は、天皇や国家が直接の関与したものではなく、個人が崇拜した仏教施設で、個人の「私寺」といえよう。



花組 (Ia)



星組 (IIIa)



雪組 (IVA1)



奥山廃寺式 (IIbB)



細弁蓮華文



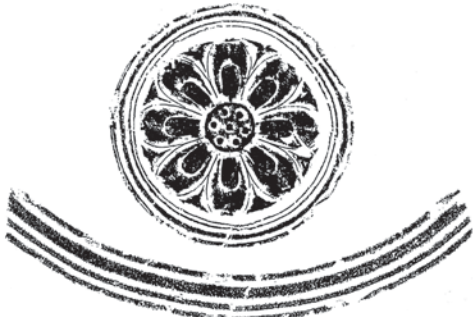
船橋廃寺式



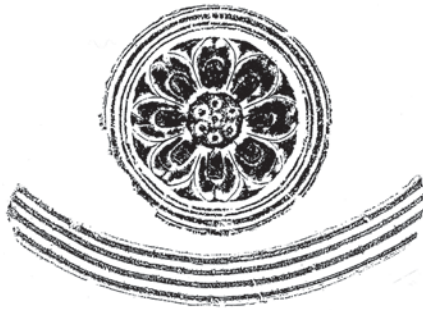
輕寺式



坂田寺式 (6A)



山田寺式 (A - AII)



山田寺式 (C - BI)



川原寺式 (601A - 651B)



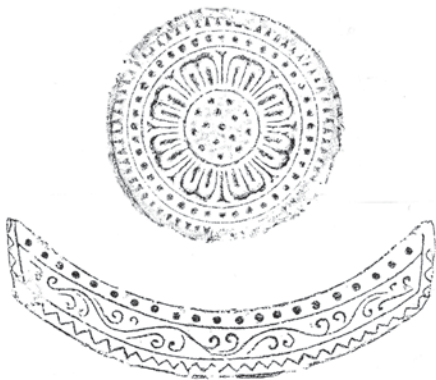
紀寺式



檜隈寺式 (IIA - IIC)



本薬師寺式 (6121A - 6647G)



藤原宮式 (6273B - 6641E)



大官大寺式 (6231A - 6661A)



岡寺式

第1図 飛鳥時代の軒瓦 (1 : 6)

考古資料にみる「寺」

古代寺院のイメージは、基壇上の礎石建築で、瓦を葺く建物である。特に、瓦が出土すると、寺院の可能性が高いとされる。後の時代には、宮殿・官衙にも瓦が使用されるが、7世紀前半においては、寺院と認識される。しかし、史料でみたように、飛鳥寺以前の「寺」は、必ずしも礎石建築とは限らず、瓦を葺かないものもあった。むしろ、この方が多かつたであろう。ここでは、断片的な考古資料ではあるが、この時期の「寺」について、考古資料から検討する。

古代寺院の中には、礎石建築ではない瓦葺掘立柱建物の寺院も大阪府新堂廃寺南門などで確認されている（富田林市 2003）。この他にも、九頭神廃寺では、7世紀後半の瓦積基壇建物が確認されているが、その下層で7世紀前半の掘立柱回廊と考えられる遺構と、これに接続する掘立柱建物がある。また、この時期の瓦も出土していることから、瓦葺掘立柱建築の前身寺院が推定されている（枚方市 1997）。

一方、集落内で礎石建物が確認される場合がある。滋賀県大津市の穴太遺跡では、礎石建物が2棟確認されている。建物1は、15cm程の低い方形土壇上に礎石を並べ、丸太材の土居桁を載せ、土壁造りの方形建物である。一方、建物2も高さ25cm程の方形土壇に材木を配した土壁造り建物と復元されている。穴太遺跡では大壁建物が多く検出されており、渡来人の集落と位置づけられており、後には穴太廃寺も建立されている。礎石建物の時期は、大壁建物や掘立柱建物と併存する6世紀末～7世紀前半であり、報告書では集落内にある祖廟の可能性を指摘する（滋賀県 1997）。一方、小笠原好彦氏は、礎石建物が方形建物であることや、後に穴太廃寺が建立されることから、「寺院」に先行する仏堂とみている（小笠原 2005）。

邸宅内で仏像を祀り、仏教行事を行う時に、厨子を用いることもある。法隆寺にある玉虫厨子は高さ約95cmで、飛鳥時代の仏堂を彷彿させる。外観の細部は、部材から鴟尾まで、本物の建築を模している。この厨子の存在は、室内で仏教行事が行われていたことを示す有力な伝世品である。これを裏付ける考古資料として、難波宮跡で出土したミニチュア瓦⁵⁾がある。難波宮の東方官衙地区（NW 80-9次・NW 89-89次）で出土した。丸瓦は4cm弱の大きさで、玉虫厨子瓦の1.5倍のサイズになる。また、隣接するNW 30次調査ではミニチュア鴟尾も出土しており、やはり同縮尺である。所属時期が前期難波宮期であり、王宮内部での出土であることから、難波長柄豊碕宮での国家儀礼に、仏教的な要素がみられ、王宮内に玉虫厨子と同等かやや大きい厨子が安置されていた可能性が指摘できる（大阪市 2004）。なお、同様のミニチュア軒丸・平瓦は兵庫県山崎町の千本屋廃寺でも出土している（飛鳥資料館 1984）。

一方、北部九州では、7世紀中頃以降に古代寺院が建立されるが、これより古い6世紀末～7世紀前半の瓦が出土することがある。牛頸窯跡群の神ノ前2号窯では無文の軒丸瓦や丸・平瓦が生産されていた（太宰府町 1979）。この供給先として、福岡市那珂遺跡の溝や土坑（福岡市 1994）、春日市惣利西遺跡の竪穴建物から出土している（春日市 1985）。いずれも6世紀末から7世紀初頭のもので、前者は「那津官家」に比定されており、後者は焼き損じ須恵器が出土することから、牛頸窯跡群の工人と関連する集落とされている。また同窯跡群の月ノ浦1号窯跡では陰文素弁蓮華文の軒丸瓦が出土しており、やはり那珂遺跡に供給されている（大野城市 1993）。このように、牛頸窯跡群で生産された初現期の瓦は、那珂遺跡に供給されるが、ごく少量しか出土していない。那珂遺跡では寺院や仏教関連の遺構・遺物が今のところ確認されていないので、建築用材として持ち込まれたと考えられるが、その建物は特定できていない（齋部 2000）。

檜隈寺跡では北魏様式の光背断片が出土している。これは舟形光背右側の周縁に取り付けられた奏樂飛天と考えられる。その様式からは、法隆寺献納宝物甲寅年銘光背（594）よりも古い北魏後半期の制作とみられ、寺院建立よりも古い時期のものである。檜隈寺における伝世品の可能性もあり、寺院創建以前の仏教遺物として注目される（奈文研 1987）。

このような事例は、必ずしも飛鳥寺以前ではないものもあるが、史料でみえる捨宅寺院や草堂などを理解する上で重要であり、「寺院」以前の「寺」を考える材料となる。

後世の「寺院」においても掘立柱建築の事例があるように、必ずしも「寺院」が礎石建物とは限らない。この場合、「寺」であるかは、別の検討が必要である。居宅内の建物で、そのまま仏像等を祀るだけ（仏殿に転用）であれば、遺構・遺物からは識別できない、しかし、檜隈寺のように、「寺院」建立よりも遡る北魏時代の光背などが出土すると、伝世品以外には、当該時期に建物内で仏像が祀られていたと考えるべきであろう。また、法隆寺の玉虫厨子のように、厨子の一部あるいは、ミニチュアの瓦が出土することがある。この場合、建物内で仏教行事が行われていた可能性を間接的に証明することになる。また、極少量ではあるが、伽藍創建以前の瓦が出土することもあり、これも屋根の一部のみの瓦葺建物となるが、仏教施設である可能性も指摘できる⁶⁾。

IV. 飛鳥寺の創建

飛鳥寺は崇峻即位前紀（587）に発願された本格的な伽藍をもつ我が国はじめての寺院である。その造営は、文献史料や考古資料から窺うことができ、その後の仏教寺院に多大な影響を与えた。ここでは飛鳥寺の造営過程を史料と考古資料の両面から整理する。

史料にみる飛鳥寺の造営

飛鳥寺の造営過程について、『日本書紀』『元興寺伽藍縁起』を中心に記していこう。

崇峻即位前紀（587）7月、蘇我・物部戦争（丁未の役）のさなか、蘇我馬子が戦勝祈願を行い、寺院を建立し、仏法僧の興隆に努めるとした。飛鳥寺の発願記事である。しかし、『元興寺縁起』では、尼僧が受戒を受けるためには、10人の尼が尼寺で受戒し、同時に10人の僧が僧寺で受戒する必要があるとする。しかしながら倭国には、尼寺（桜井寺）はあるが法師寺がないということで、まずは法師寺創建を、用明天皇が厩戸皇子・蘇我馬子に指示している。その法師寺と尼寺は、互いに鐘の音が聞こえるほど近くにあるべきだという（用明2年条）。つまり、『元興寺縁起』では、飛鳥寺の造営を、戦勝祈願による寺院の造営と仏教の興隆ではなく、仏教の興隆のために尼寺と法師寺を造営するとされているのである。いずれにしても、飛鳥寺の造営は、仏教興隆の大きな試金石となったことは間違いない。

翌年には、百済から仏の舍利が献上され、また、僧、聆照律師・令威・恵衆・恵宿・道巖・令開等、寺工の太良未太・文賈古子、鑪盤博士の将徳白味淳、瓦博士の麻奈文奴・陽貴文・悽貴文・昔麻帝弥、画工の白加を遣わしてきた。そして、飛鳥衣縫造が祖樹葉の家を壊わして、飛鳥寺の造営を開始した（崇峻元年（588）是歳条）。これらのことから、飛鳥寺の造営には、僧侶だけでなく、百済からの造寺に関わる直接的な技術援助があったことがわかる。崇峻3年（590）には、寺の建築用材を山林から調達している（崇峻3年10月条）ことから、この頃までに敷地の造成が行われていたと推定される。飛鳥寺の地形は、南東に（飛鳥寺瓦窯のある）丘陵があり、

この北では、遺構面が浅く地山が露出するので、かなり大きな土木工事があったことが窺われる。崇峻5年(592)10月には金堂と回廊の建築がはじまり(崇峻5年10月条)、その2ヶ月後には仏舎利を塔の心礎に埋納し(推古元年(593)正月15日条)、翌日に柱を立てる儀式が行われている(推古元年正月16日条)。『扶桑略記』には、この時、大臣以下100人余りの人々が、百済服を着て参列したとも記す。推古4年(596)11月には「法興寺、造り竟りぬ」とあり、堂塔が完成したと記す。そして馬子の子である善徳臣を寺司とし、高句麗の慧慈、百済の慧聰が住みはじめた(推古4年11月条)。しかし、塔の立柱から4年で、他のすべての建物が完成したとは思えず、塔の露盤銘に「丙辰年(596)の十一月に既る」(元興寺縁起)という塔竣工記事があることから、推古4年11月条は塔の完成を記すものと考えられている。その後、しばらくは記録に表れないが、推古13年(605)4月1日に鞍作鳥に丈六仏をの造仏を命じている。この時に、高句麗から黄金300両を献じられた。そして、翌推古14年(606)4月8日に完成し、堂内に安置、設齋したと記す。一方、『元興寺縁起』「丈六光背銘」によると大興王が献上した黄金は320両で、608年の裴世清によって送り届けられ、推古17年(609)に大仏を納めている⁷⁾(大脇1989)。丈六光背銘の方が『書紀』よりも数値が詳細で、より原文にちかいとされることから、こちらが正しいとされる。いずれにしても、推古4年11月の塔竣工以降、金堂の丈六仏の造仏まで10年ちかい空白期間があり、この間、中金堂に本尊のない期間は考えられず、塔竣工後も堂の造営は継続しており、推古17年(609)に本尊を安置することにより、完成したとみるべきであろう。よって、飛鳥寺はわずか22年で堂塔が完成したことになる。

考古資料にみる飛鳥寺の造営

文献史料からは、崇峻即位前紀(587)7月に発願し、翌崇峻元年(588)から造営が始まり、推古17年(609)に丈六仏を納めて完成したことがわかる。ここでは、これらを考古資料(奈文研1958)から裏付けてみたい。

飛鳥川の右岸に位置する飛鳥寺は、当時の境内地が南北293m、東西215～260mにも及ぶ。現在は旧寺域の北2/3が「飛鳥」集落となっており、寺域内を東西と、それに接続する南北の幹線道路がT形に貫通している。南1/3は水田が広がっており、遺跡は水田下に眠っている。中心伽藍跡地には飛鳥寺(安居院)があり、釈迦如来坐像(飛鳥大仏)が坐す現在の本堂は、飛鳥寺中金堂の地にあたる。

飛鳥寺の伽藍配置は、中央に塔をおき、その北及び東西に金堂を配置する一塔三金堂の特殊な配置で、中門からのびた回廊がこれらを取り囲んでいる。講堂は回廊の北方に位置している「飛鳥寺式伽藍配置」である。初期寺院は四天王寺式が多く造られているが、我が国初の寺院に、他に例をみない伽藍配置を採用されたことは注目される。このうち東西金堂は、二重基壇で基壇築成がなされている。

塔は地下2.7m程の深さに巨大な心礎を据え、上面に方形の舎利孔がある。この心礎埋納品には、多様な遺物が含まれていた。その品々を示すと、玉類：勾玉4、管玉5、切子玉2、銀製空玉3、銀製山梔玉1、丸玉1、トンボ玉3、ガラス小玉2366。金環23以上。金銀：金延板7、金小粒1、銀延板5、銀小粒7。金銅製打金具：円形金具14、杏葉形金具25以上。鍔付半球形金銅金具7以上。金銅鈴7。金銅製瓔珞146以上。馬鈴1。挂甲1。蛇行状鉄器1。刀子12(うち5点は破片)。雲母片数点となる。横穴式石室の副葬品に共通する遺物であると同時に、後期古墳にはみられない仏舎利埋納品と共通する遺物も混在するという特色がある。

飛鳥寺は、我が国最古の伽藍寺院である。よって、はじめての瓦葺建築であった。当然、基壇をもち、礎石の上に柱を立てる建築としても初めてということになる。すでに見たように、礎石建築としては穴太遺跡でもみられるが、特殊なものであり、瓦についても牛頸窯跡群や那珂遺跡では無紋瓦が、ごく一部出土しているが、その後の系譜がたどれず、イレギュラーな存在である。これに対して、花組（素弁十一弁蓮華文）と星組（弁端点珠素弁蓮華文）の2系統の瓦が、飛鳥寺の創建瓦であり、百済地域の瓦と共通すると同時に、その後の瓦に受け継がれていく。これらの瓦は大量に必要となり、瓦成形時の当て具の痕跡に、須恵器甕にみられる痕跡と同じものがみられることから、瓦作りには、当時の須恵器工人が大量に動員されたことがわかる。

奈良元興寺は、養老2年（718）に、飛鳥から平城京へと法灯を遷した寺院である。その後も飛鳥には主要伽藍が残されており、平城京へは一部建物の移築と、新築の寺院である。現在の元興寺極楽庵の屋根には、飛鳥時代の瓦が今も使われており、飛鳥寺から移築した時に運ばれたものであろう。他にも古材が多く保管されており、その中には、巻斗も含まれている。この材の年輪を計測すると、最外周の年輪が588年と判明し、残念ながら樹皮部分がなかったので、正確には不明だが、樹皮に近い部分まで残ることから、590年頃の伐採と推定された（狭川編2004）。この年代は、「山に入りて、寺の材を取る」（崇峻3年（590）10月条）に対応するもので、史料の真実性を裏付けるものとなった。

現在、安居院本堂に安置されている釈迦如来坐像（飛鳥大仏）は、飛鳥寺中金堂にあった本尊である。建久7年（1196）に落雷で伽藍は焼失し、飛鳥大仏も焼失した。その時に仏頭と手だけが残されたと『上宮太子捨遺記』には記されている。昭和48年の仏像の詳細な調査では、残留しているのは頭部の額・両眉・両眼鼻梁のほか、左手の掌の一部、右膝上にはめこまれる左足裏と足指などとされる。これに対して、近年の蛍光X線分析の結果によると、造立当初と修復後とされる部分に金属組成に際立った差がみられないことから、当初部分が多く残されているのではないかという見解もある（大橋2012・櫻庭2012・2013）。しかし、同様の調査において、金属組成が類似するのは、破損した材料にによって補修されたためとも考えられ、創建当初の残存状況については、さらなる詳細な調査の上、慎重な議論が望まれるという意見もある（藤岡ほか2017）。この釈迦如来坐像は、止利様式で作られている。面長の顔、アーモンド形（杏仁形）の目、アルカイック・スマイルの微笑みをもち、仏衣の胸元に內衣をしぼる紳帯の結目を表現すること（紳帯式衣）、仏像の全身を覆った大衣の長い裾が台座にかかって裳懸座を形成すること（裳懸座）、仏菩薩の着衣や天衣が左右に張り出して鰭状をなすこと（鰭状衣文）などが、よく知られた特徴である。

V. 飛鳥寺の系譜

飛鳥寺の概要については、すでにみた通りであるが、その諸属性の系譜はどこに求められるであろうか。ここでは、これらについて検討する。

飛鳥寺の創建軒丸瓦は、花組（素弁十一弁蓮華文）と星組（弁端点珠素弁蓮華文）である。これらは瓦当文様だけでなく、瓦当と筒部の接合法においても違いがみられ、両者の違いは工人集団の差と考えられている（納谷2005）。これらの瓦文様や造瓦技術は、百済にルーツがあり、さらには南朝にまでたどれることがすでに指摘されている（亀田1981・2000・2009・花

谷 2009・森ほか 2008・佐川 2009・2012)。近年でも、花組は、扶余の王宮である官北里遺跡・扶蘇山城・益山王宮里遺跡出土例に類似のものが確認されている。一方、星組の瓦当文様は、百濟大通寺式と共通し、瓦当裏面の整形に回転なで技法を採用、肩ほぞ形に加工した接合部などは、金德里系を製作した瓦工集団が関与したと考えられている。この大通寺式軒丸瓦は中国南朝梁の造瓦技術を導入して成立したと考えられている。前者は百濟の王宮及び離宮であり、後者も王権に関わる寺院である（清水 2012・李 1999）。なお、豊浦寺で出土する従来「高句麗系」と呼ばれる雪組（弁間点珠有稜素弁蓮華文）は、高句麗瓦に酷似するものがないことや、調整過程でケズリを多用する特徴が近年の調査で、慶州月城など古新羅で多く出土することがわかってきたことから、新羅系の工人集団の可能性が指摘されている（清水 2012）。

飛鳥寺の伽藍配置は一塔三金堂の飛鳥寺式伽藍配置をとる。7世紀初頭の伽藍配置は四天王寺式あるいは山田寺式の伽藍配置が多く、中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶもので、百濟大寺以降に、金堂と塔が東西に並列する法隆寺式伽藍配置が現れる。これは舍利（塔）を中心とした信仰から、仏像（金堂）の信仰への変化と考えられる（石田 1956・森 1998）。その後、法起寺式・川原寺式伽藍配置など、金堂の配置が多様化するのには、本尊の種類（釈迦如来・薬師如来・阿弥陀如来など）と象徴する方位に関連するともみられている（菱田 2005）。さらに7世紀後半には双塔式（薬師寺式）の伽藍が出現する。

韓半島の百濟寺院の伽藍配置は、回廊が単純に講堂に接続しないが、いずれも堂塔が一直線上に並ぶ一塔一金堂式である（東ほか 1989）。同様に古新羅の寺院も、皇龍寺創建伽藍（推定）や芬皇寺などのように一塔一金堂式であるが、芬皇寺の創建伽藍（634）は飛鳥寺とはやや異なる品形の一塔三金堂式である（慶文研 2005）。

一方、統一新羅になると四天王寺や感恩寺のように双塔式伽藍が採用され、主流となる（東ほか 1988）。ただし、統一新羅以降に創建された寺院の中でも、天官寺跡・甘山寺跡は単塔式伽藍の可能性が高いと推定されている（田中 2019）。これに対して、高句麗寺院には一塔三金堂の配置が清岩里廃寺・上五里廃寺・土城里寺や定陵寺跡にみられる（東ほか 1995・千田 2015）。そして、南北朝・隋代の中国では、伽藍配置が不明なものが多いが、北魏洛陽城の永寧寺や東魏北齊鄴南城の趙彭城遺跡、長安城の青龍寺など、塔院を中心としたものが多い。ただし、唐代初頭には絵図によると西明寺が双塔式に描かれている⁸⁾（佐川 2010・向井 2013）。

このような伽藍配置の類似から、四天王寺式は百濟式の配置を祖型とみることができ、薬師寺式は統一新羅の双塔式の影響とみられる。ただし、一塔一金堂は、百濟だけでなく、古新羅でも見られる事から韓半島の古式寺院ののスタンダードとすることも可能であろう。そして塔から金堂へと主眼が移り、双塔式が中国・新羅にみられるようになる。これに対して、飛鳥寺式伽藍配置は百濟・新羅・隋にはなく、高句麗の清岩里廃寺に類例が求められることから、高句麗に祖型を求めることができる。しかし、高句麗の直接の影響ではなく、百濟経由でもたらされた可能性は考えられる（李 2015）。近年、扶余定林寺や王興寺が中門・塔・金堂・講堂と並ぶ配置の東西回廊に建物が接続する事例が確認されている。この東西建物が、飛鳥寺の東西金堂の祖型という理解もある（佐川 2010）が、この建物は附属建物であり、金堂ではない。よって、この事例から、飛鳥寺式伽藍配置が百濟由来のみということとはできないと考える。

飛鳥寺の東西金堂は中金堂の凝灰岩壇正積基壇とは異なり、二重基壇で上段が玉石積みの基壇で、下成部にも礎石が据えられている。このことは、中金堂よりも、東西金堂の格が低いことを意味している。その意味では、中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ百濟式伽藍配置に、

東西金堂が付加されたものともいえる。二重基壇の類例は、我が国にはなく、高句麗の清岩里廢寺をはじめ、百濟の扶蘇山廢寺・定林寺・四天王寺・平濟塔廢寺や新羅の皇龍寺などでみられる（奈文研 1958）。このことから、二重基壇が韓半島からの影響であることはわかる（李 2015）。

飛鳥寺塔心礎埋納品は、すでに見たように舍利莊嚴具の他、挂甲・馬具・耳環・刀子・步揺などの飾金具・各種玉類などの古墳副葬品に共通する品があることは知られている。これは古墳時代から律令時代への過渡期にあたるためと理解されている。しかし、近年、扶余王興寺の舍利容器と舍利莊嚴具が確認され、塔基壇の地下に舍利孔をもつ大きな石を据えていることが判明した。舍利容器には「丁酉年（577）」の銘が刻まれており、塔建立の年代がわかる。また 8000 点にも及ぶ舍利莊嚴具には、装身具が多く確認されている。また、益山弥勒寺西石塔の心礎石からも、舍利容器と 10000 点以上の舍利莊嚴具、そして「己亥年（639）」銘の金板が出土している。ここでも装身具が多く含まれている。このように塔地下に舍利孔をもつ心礎（舍利装置石）は、今のところ中国では確認されておらず、百濟で誕生した方法である可能性が高い。また、舍利莊嚴具についても、王興寺・弥勒寺で、装身具との共通性がみられ、飛鳥寺の埋納品が、百濟からの影響も窺えることになる（佐川 2010）。

崇峻元年（588）是歳条には、百濟から舍利・僧・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工などの造営工人の技術援助があったことが記されるが、飛鳥寺の舍利方法は百濟の影響がつよいことがわかる。また、『扶桑略記』には、舍利埋納儀礼において、蘇我馬子ほかの人々が百濟服を着用していたことも記されており、百濟式の儀礼が行われた可能性が高い（諫早 2017）。しかし、飛鳥寺埋納品には、装身具だけでなく、馬具も含まれている。これは百濟の儀式様式だけではなく、やはり古墳副葬品との共通点を示唆しているとみるべきで、倭国のこの時期独自のことである。

飛鳥寺塔基壇は、版築によって築成されている。掘込地業は、橙黄色砂と茶褐色粘質土を互層に積み重ね、さらに基壇を構築している。このような版築は山田寺の金堂・塔跡や奥山廢寺塔跡・川原寺塔跡などでもみられる。青木敬氏は、百濟王興寺や弥勒寺・帝釈寺、さらに南朝の寺院でも採用されるような性状の異なる山土を使い分けて突き固める版築技術を「南朝・百濟系統の技術」と呼称する。また、吉備池廢寺や大官大寺・斑鳩寺若草伽藍では、同質の山土を一貫して積み上げており、永寧寺にもみられる技法を「華北系統の技術」とする。さらに和田廢寺塔跡では、礫と土を交互に積み上げた基壇が作られており、このような事例は新羅皇龍寺・四天王寺などでみられ、さらに北朝の鄴城でもみられることから「北朝・新羅系統の技術」とする。これらのことから版築技術だけでも、「南朝・百濟系統」→「華北系統」→「北朝・新羅系統」と導入され、飛鳥寺の場合は、「南朝・百濟系統の技術」の版築が用いられていたとする（青木 2017）。

飛鳥大仏の止利様式は、中国河南省龍門石窟の北魏様式の諸仏像との共通性から、中国北魏様式の影響を受けたものと推定されていた（松村 1971・水野 1949・毛利 1978）が、北朝の仏像群も中国南朝の様式の影響を強く受けたものであり、中国南朝の仏像様式が百濟を経由してもたらされたと考える研究者も多い。また、山東半島にある山東省青州市の龍興寺跡で発見された 400 体のにぼる北魏から北齊にかけての仏像が、アーモンド形の目・古式微笑・鱗状衣文・裾のしわの表現などが、飛鳥様式と類似する点に注目が集まっていた。この地は北朝領域には入るが、長く南朝支配を受けるとともに、南朝の影響を強く反映されると理解される（吉

村 1983・1992・1995)。

これらの検討により、飛鳥寺の造営には史料的にも、考古学的にも、南朝及び百済の影響が色濃く残されていることがわかる。しかし、百済だけでなく、高句麗僧の来日や本尊の黄金供与、一塔三金堂の伽藍配置からみて、高句麗の影響を受けていることも間違いない。そして、これらの外来文化は、瓦製作に須恵器工人が動員されていること、塔埋納品に馬具など古墳副葬品と共通するものが含まれることから、我が国の古来からの文化・風習・技術とが融合していることも判明する。

VI. 7世紀前半の寺院

飛鳥地域には飛鳥寺をはじめ、7世紀前半の素弁・単弁瓦を出土する遺跡がある。ここではこれらの瓦を出土する寺院の造営過程について、明日香村 2006・大脇 1995a・清水 2012・花谷 2000a・橿考研博物館 1999・古代瓦研究会 2000・2005・2009a・2009b・2010 を参考に概観する。

豊浦寺（建興寺・豊浦尼寺・向原寺）

飛鳥川左岸に位置する豊浦寺は、山田道の南側の甘樫丘山裾にある。寺域については明確ではない。豊浦寺の創建については『日本書紀』によると、仏教公伝の過程で登場する。欽明 13 (552) 年に百済の聖明王が献上した金銅仏などを蘇我稲目が小墾田の家に安置し、その後、仏像を向原の家に移して寺としたことにはじまるとされる。さらに物部尾輿は仏殿を焼き払い、仏像を難波の堀江に捨てたと記す（欽明 13 年 10 月条）。一方、『元興寺縁起并流記資財帳』によると、戊午 (538) 年に牟久原殿に仏殿が設けられ（宣化 3 年 12 月条）、これが敏達 11 (582) 年には桜井に遷され、「桜井道場」と呼ばれ、同 15 年には桜井寺と改称し、等由羅寺に発展したとする（敏達 11 年条）。また、『元興寺縁起』推古元年 (593) には「等由良の宮を寺と成しき」とあり、推古天皇の豊浦宮跡地を豊浦寺としたとする。

豊浦寺が正史に登場するのは舒明即位前紀 (628) で、山背大兄王が蘇我蝦夷の病の見舞いに来たときに、豊浦寺に滞在したと記されており、さらに『聖徳太子伝暦』には舒明 6 年 (634) に塔の心柱を建てるとある。朱鳥元 (686) 年、天武天皇の追福のため、豊浦寺をはじめ五大寺で無遮大会が行われている。よって、創建の年代は史料からは明確にはし難いが、628 年には何らかの建物（金堂？）が建てられており、舒明 6 (634) 年に塔を造営し、朱鳥元 (686) 年の段階では完成していたと考えられる。これらのことは講堂の下層に 6 世紀後半から 7 世紀初頭の掘立柱建物があり、豊浦宮の一部であると考えられることや、金堂が寺域造成の整地と一連で造られていること、金堂・西面回廊？の創建瓦が星組、塔が雪組、講堂が船橋廃寺式瓦（素文縁素弁蓮華文）であるので、金堂の創建時期は 590～610 年の間に位置付けられる。塔は発掘調査で遺構を確認していないが、出土瓦から 7 世紀第 I 四半期に考えられる。また、講堂と尼房あるいは回廊と考えられる遺構もこの頃に造営されており、7 世紀後半には完成していたことを裏付けている（橿考研 1995・1998・奈文研 1981a・1986）。伽藍配置については、回廊が明確ではないが、金堂・講堂が南北に並び、推定される塔がその南方に配置される四天王寺式が有力である。（花谷 2000b）。

和田廃寺（妙安寺・葛城寺・葛城尼寺）

和田廃寺は山田道の北方水田にある。現在は塔の土壇と、若干の礎石が土壇上に残されて

いるのみである。

和田廃寺については、大野丘北塔にあてる説と、葛城寺にあてる説があった。前者は、「大野丘」が「甘檜丘」に比定されることや、塔以外の堂の建立記事がみられないことから、敏達14年(585)2月15日条にある蘇我馬子が建てた「大野丘北塔」に比定するものである。しかし、発掘調査の結果、この塔の造営年代が7世紀後半と判明したため、この説は成立しなくなった。一方、後者は、『上宮聖徳法王帝説』に「葛木寺、葛木臣に賜う」とあり、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』に聖徳太子建立の寺に「葛城尼寺」をあげている。『聖徳太子傳暦』にも「葛木寺また妙安寺という。蘇我葛木臣に賜う」とある。また桜井が「葛城寺の前にあり。豊浦寺の西にあり」(光仁即位前紀条)とあることが根拠とされる。発掘調査では川原寺式瓦(銘齒紋縁複弁蓮華紋)を葺く7世紀後半の塔だけで、西と北には関連する仏堂や回廊は確認されていないので伽藍配置は明確ではない。ただ、7世紀中頃前後の掘立柱建物が確認されており、さらに7世紀前半の古い段階の花組・雪組・奥山廃寺式(角端点珠素弁蓮華文)・圏線状外縁素弁十一弁蓮華文瓦も一定量出土しているため、この時期の小規模な堂があった可能性がある(奈文研1975・1976a)。

橘 寺 (菩提寺・橘樹寺・橘尼寺)

飛鳥川の左岸に位置する橘寺は、川原寺と対峙するような立地にある。当時の境内地については北辺を除いて明確ではないが、東辺は地形からみて南北道まで、西辺はこれまでの成果から東西約400mの範囲が旧境内地であったと考えられる。現在は中心伽藍の地に、現橘寺が法灯を伝えており、当時の伽藍配置は東面する四天王寺式と推定されている。

橘寺の創建については記録がなく、明確ではないが、聖徳太子建立の寺のひとつとする説は天平19(747)年の『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』にみえる。橘寺の最も古い記録は「橘寺の尼房に失火して、十坊を焚く」(天武9年(680)4月11日条)である。このことから天武9年には尼房が完成しているほど、伽藍が整備されていたことがわかる。その創建は境内での発掘調査で飛鳥寺と同範の花組が出土することから、7世紀初頭には金堂が建てられたと考えられる。その後、山田寺式瓦(重圏紋縁単弁蓮華文・7世紀中頃)には塔が建設され、川原寺式の瓦が出土することから、7世紀後半に川原寺と同時期に整備されたことがわかる。その後、藤原宮式瓦(7世紀末)が出土することから、この頃にも伽藍が整備されたと考えられる。(檀考研1999・亀田1997・花谷2000a・大脇1989)。

檜隈寺 (道興寺)

檜隈寺は南北に延びる尾根上にあり、現在、伽藍地には東漢氏の阿知使主を祭神とする於美阿志神社の社殿がある。社殿の南東には平安時代後期の十三重石塔が塔跡の上に建てられている。檜隈寺の創建に関する記録はみられないが、「檜隈寺・軽寺・大窪寺に各百戸を封ず。30年を限る」(朱鳥元年(686)8月21日条)という記事があり、この頃には檜隈寺が存在していたことがわかる。その伽藍配置は西面回廊に中門があり、南面に金堂、北面に講堂が接続する。中門を入った回廊内の正面には塔が配置されていると推定されている。

発掘調査では金堂所用瓦が、7世紀後半の檜隈寺式(幅線紋縁複弁蓮華紋軒丸瓦)・重孤紋軒平瓦、塔・講堂が藤原宮式軒丸瓦・右偏行唐草紋軒平瓦であることが判明している。しかし、伽藍地や講堂基壇内からは7世紀前半に遡る花組・火炎文単弁蓮華文・山田寺式瓦が出土しており、この頃まで遡る仏堂があった可能性があり、さらに北魏様式の光背断片も出土している。(飛鳥資料館1983・奈文研1980・1981b・1982a・1983・1987・花谷2000a・2003)。

坂田寺（金剛寺・坂田尼寺）

坂田寺は石舞台の南方の山間部から飛鳥川へ下る斜面部を造成して造られている。奈良時代の伽藍中枢部には斜めに県道が通過しているが、これは近年の新しい道路である。これ以前には現在も地割として残る里道が主要な道路であった。

坂田寺の創建については諸説があり、『扶桑略記』には継体 16（522）年に司馬達等が坂田原に草堂を建て、本尊を安置したとある。また、『日本書紀』には鞍部多須奈が天皇の病氣平癒のために出家し、仏像と寺をつくったとする（用明 2 年（587）4 月 2 日条）。さらに推古 14（606）年に飛鳥大仏の金堂への安置の功績により、鞍作鳥が近江坂田郡の田を賜り、これを坂田寺の造営にあてたとする（推古 14 年（606）5 月 5 日条）。これらの記事、特に継体 16（522）年の年代の信憑性については明らかではないが、渡来系氏族である鞍作氏の氏寺として飛鳥時代でも早い段階で造られた寺院であることは間違いなさそうである。このことは、坂田寺跡から花組や、坂田寺式瓦（単弁蓮華文）・手彫り偏行忍冬唐草紋軒平瓦が出土することから、その創建は 7 世紀初頭に遡ることがわかる。飛鳥時代の坂田寺の伽藍はいまだ確認されていないが、7 世紀前半の石組溝や方形池が見つまっている（奈文研 1973）。また、7 世紀後半の土坑や溝もあり、出土瓦からは 7 世紀初頭の創建後、7 世紀前半・中頃・後半・藤原宮期の瓦も出土しており、伽藍造営の継続、あるいは屋根の補修が行われていたことが推測される。これを証するように『日本書紀』には朱鳥元（686）年に天武天皇のために大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺と共に無遮大会が開かれており、当時、格の高い寺院として飛鳥五大寺に含まれていた。

その後、坂田寺が注目を集めるのは、奈良時代前半のことである。坂田寺の信勝尼は天平 9（737）年に経典を内裏に進上するなど、内裏と密接な関係を持つようになる。さらに天平勝宝元（749）年には東大寺大仏殿東脇侍を寄進する。西脇侍を寄進したのは法華寺であったことを考えると、この頃の坂田寺はかなりの財政力と中央との太いパイプを持っていたことが伺われる。奈良時代の坂田寺は発掘調査でかなり判明してきている。信勝尼のいた奈良時代前半にはすでに金堂は建てられており、出土する土器から法会も催されていたことがわかる。また、伽藍の西方に大型の掘立柱建物があり、信勝尼の住居として有力視されている。回廊や講堂、回廊内建物がこの段階で建てられていたかは確認できないが、少なくとも、金堂の須弥壇が改修される 765 年以降には存在していたものと考えられる。その伽藍配置は、北面回廊に中門があり、東面回廊に金堂が接続する。回廊内には 2 棟の建物があり、回廊外の東方にも須弥壇をもつ建物がある。さらに山側にも、瓦葺建物が推定されている。（飛鳥資料館 1983・明日香村 2000・奈文研 1981c・1992・1993・西川 2005・西口 2002）。

立部寺（定林寺）

立部寺（定林寺）は飛鳥南方の独立丘陵上に位置している。現在は史跡として維持管理がなされているが、昭和 60 年代まで春日神社が伽藍中心部に建っていた。その後、神社はやや東に下った位置に遷った。集落は丘陵の東方に広がっており、丘陵の北・西・南の谷筋は水田が良好に広がっている。

立部寺（定林寺）の創建については明確ではなく、『聖徳太子伝暦』や『太子伝私記』は、太子建立の七カ寺の一つとしてあげているが、他の記録には一切現われない。その造営氏族には平田忌寸の名前があがる。また、飛鳥池遺跡出土「寺名木簡」に「立部（寺）」がある（伊藤 2000）。

発掘調査は部分的ではあるが、塔・推定講堂・回廊の一部を確認している。ただし、鎌倉期の改修や調査面積が狭いこともあり、塔を除いて、飛鳥時代の伽藍は明らかとはなっていないが、回廊の北面に金堂がとりつき、回廊打ちの西半に塔があるが、東半については不明。また、伽藍の正面が明確ではなく、地形からは東面することも考えられる。これらの堂塔の造営順序は明確ではないが、出土した瓦からある程度の寺の変遷は追うことができる。

創建瓦は飛鳥寺と同じ花組で、定林寺の創建を7世紀初頭と推定できる。また、川原寺式・藤原宮式の軒瓦が出土することから7世紀後半～末に次の建物が造営、あるいは伽藍の修理がなされたと考えられる（奈文研1978）。

奥山廃寺（小墾田寺）

奥山廃寺は山田道の北方に位置する。伽藍は南から塔・金堂・講堂と並び、これらを囲む回廊が講堂に取り付く四天王寺式伽藍配置の寺院である。現在は奥山集落が伽藍中心部と重なっており、金堂跡地には、現在も久米寺があり、その境内地に塔基壇が良好に残され、十三重石塔が建てられている。

奥山廃寺はその創建の由来や造営氏族については明らかではないが、小墾田臣や境部臣摩理勢などの名があげられている。そこで奥山廃寺を高市大寺とする説（田村1960・網干1980）もあったが、近年は、当地が「小墾田」にあたること、平安時代の井戸から「少治田寺」と読める墨書土器が出土していることから、「小墾田寺」と推定する説が有力である（大脇1997・小澤1995）。小墾田寺に関する最初の記録は朱鳥元（686）年の天武天皇のために行われた無遮大会が五大寺（大官大寺・飛鳥寺・川原寺・小墾田豊浦寺・坂田寺）で行われたことである（朱鳥元年（686）8月21日条）。この頃すでに伽藍がある程度整っていたことはわかる。これまでの発掘調査によると、7世紀前半に金堂、7世後半に塔の造営と金堂の改修が推定されてきた（奈文研1990）が、近年、佐川正敏・西川雄大氏によって、瓦の分布と年代から、塔の年代を金堂に後続する7世紀前半とした（佐川・西川2000・花谷2000a）。ここではこれに従う。

金堂及び中門・回廊の創建が奥山廃寺式瓦、塔が奥山廃寺式・船橋廃寺式瓦とみて、山田寺式瓦の7世紀後半の屋根葺き替え用とした。この大改修の時期と先の朱鳥元（686）年の無遮大会の時期がほぼ重なる。ただし、奥山廃寺出土瓦には7世紀初頭の星組・雪組の軒瓦が出土しており、塔基壇下層には別の掘込み事業があり、あるいは7世紀初頭に小規模な仏堂があったのかもしれない（奈文研1988）。

雷廃寺（高市大寺？）

雷丘の北西、飛鳥川右岸にある比較的多くの瓦が出土する場所で、雷廃寺と仮称されている。雷丘の北方には、藤原京条坊に沿う邸宅遺構（雷丘北方遺跡）がある（奈文研1994・1995）が、ここでの瓦は、溝や井戸に転用されたもので、この遺跡の北西が雷廃寺の中心されている。しかし、寺院にかかわる遺構は未確認で、遺物も瓦が出土しているのみである。瓦は、東方にある大官大寺式のものもあることから、百濟大寺から673年に遷されてきた高市大寺・天武朝大官大寺とも推定する理解もある（大脇1995b・小澤2018）。「小紫美濃王・小錦下紀臣訶多麻呂を以て、高市大寺造る司にめす」（天武2年（673）12月17日条）、「高市大寺を改め、大官大寺とす」（大安寺縁起・天武6年（677）9月）とあり、天武朝大官大寺が高市大寺で、これが百濟大寺から遷されたものであることがわかる。

当遺跡出土瓦は、7世紀前半の星組・雪組・細弁十六弁蓮華文などの軒丸瓦があり、7世紀後半以降のものには、川原寺式・重圈紋縁鬼面文・紀寺式（雷紋縁複弁蓮華文）・藤原宮式・

大官大寺式瓦がある。当遺跡が百濟大寺から遷された高市大寺であるとする、7世紀前半の瓦の由来が不明であることと、吉備池廃寺から移されたとされる瓦がないこと、基壇痕跡がみられないことが課題となる。

丈六南遺跡

下ッ道と山田道の交差点にあたる軽衢の南西に位置する遺跡である。1936年の檀原神宮周辺整備に伴う土取りで、多数の柱根が発見された。また1956年には、1.8m間隔で礎石が並んでいた(末永1961・藪内1993)とされるが、伽藍配置などは明確ではない。ここでは雪組のほか、平城宮式軒丸瓦が出土している。

日向寺(八口寺)

香具山南麓の南浦集落の中に、現在も日向寺がある。『扶桑略記』推古29年(621)2月22日条に、厩戸皇子造立九院の一つとして「日向寺」の名前があがる。ここにはかつて直径2mにも及ぶ心礎があったが、明治初年に破却された。発掘調査も少ないことから、伽藍配置などは明確ではない。この寺について、大脇潔氏は、天武元年(672)7月3日条にみえる「八口」などを根拠に、蘇我氏同族の箭口臣の氏寺とした(大脇1997)。なお、飛鳥池遺跡出土「寺名木簡」に「八口(寺)」とあり、当寺と推定されている(伊藤ほか2000)。周辺から出土する瓦には、復古瓦ではあるが花組があり、7世紀前半の丸瓦もあることから、この時期の創建と推定される。また、川原寺式や大官大寺式瓦、大安寺所用瓦も出土することから、奈良時代までは存続していたものと推定される(奈文研1982b)。

大窪寺

大窪寺は下ッ道の西側に位置し、檀原市大久保集落内に塔心礎がある。ただ、発掘調査により、心礎は現位置から動かされていることがわかっている(檀原市1992)。現在の神武陵に隣接する字「塔垣内」から遷されたとも考えられてきたが(大脇1995a)、塔心礎が字「寺内」にあり、礎石が付近から出土したこと、「塔垣内」は飛鳥池工房から出土した「山本寺」に比定できることから、やはり大久保集落内にあったとした(伊藤1999・伊藤ほか2000)。

大窪寺に関わる史料は、朱鳥元年(686)8月21日条に、檜隈寺・大窪寺とともに封百戸を30年間に限って与える記事があるのがほぼ唯一である。これ以外に史料がない。その造営氏族は大窪史が想定されている(大脇1997)。

出土瓦によると、軒丸瓦に複線文縁素弁八弁軒丸瓦や山田寺式瓦があることから、7世紀中頃の創建と推定され、川原寺式・檜隈寺式・藤原宮式や平城宮瓦もあることから、奈良時代までは存続する。

軽寺(法輪寺)

下ッ道と山田道の交差点にあたる軽衢の南東に位置する寺院である。現在も法輪寺が所在している。

朱鳥元年(686)8月21日条には、檜隈寺・大窪寺とともに封百戸を30年間に限って与える記事があるのが初出で、この時期に軽寺があったことがわかる。また、飛鳥池木簡にも「軽寺」とある(伊藤ほか2000)。その後、平安時代の寛弘4年(1007)に藤原道長が軽寺に宿した記事があり、平安時代から鎌倉時代の軽寺は、『諸寺雑記』に講堂に釈迦・観音像があり、塔と回廊が残っていたことがわかる。土壇の残存状況や地形からみて、法隆寺式伽藍配置が推定されている。この軽寺の造営氏族としては、寺名から推測して、軽部臣や軽我孫・軽忌寸が推定されるが、軽忌寸の可能性が高い。出土瓦から、軽寺式(素弁八弁蓮華文)が創建瓦と考え

られ、7世紀中頃と推定されるが、各堂塔の造営時期は明確ではない（大脇 2005）。なお、寺域では北面大垣が確認されている（橿原市 1999）。

吉備池廃寺（百濟大寺）

百濟大寺は天皇発願の最初の寺院で、高市大寺、大官大寺、大安寺へと法灯を繋ぐ。舒明 11 年（639）7 月条に、百濟川のほとりに大宮と大寺を造り、西の民が宮を、東の民が寺を造るとあり、天皇家の王宮と大寺がセットで造営されている。同年 12 月には九重塔を建てたとする。この百濟大寺は『扶桑略記』（舒明 11 年正月条）や『大安寺伽藍縁起并流資財帳』には、熊凝精舎を移したものと記す。皇極元年には「大寺の南庭」に菩薩像と四天王像を安置して雨乞いをしている（皇極元年（642）7 月 27 日条）。また同年 9 月 3 日には、百濟大寺の造営の詔をだし、近江・越の丁を徴発していることから、この時期にも造営が続いていたことがわかる（皇極元年（642）9 月 3 日条）。そして天武 2 年（673）には造高市大寺司任命記事があり、高市大寺への移築がはじまる（天武 2 年（673）12 月 17 日条）。

発掘調査では、桜井市吉備池の辺で、東に金堂、西に塔の巨大な基壇が確認された。さらにこれらを囲む回廊も確認された法隆寺式伽藍配置である。個々の堂塔規模が巨大なだけでなく、伽藍全体も巨大で、後の大官大寺に匹敵する規模である。出土瓦が極端に少なく、基壇化粧石もみられないことから、高市大寺への建築部材を含めた移築を窺わせる。出土瓦は、山田寺式（重圈文縁単弁八弁蓮華文）・型押し忍冬唐草紋軒平瓦で、山田寺式よりもわずかに古い時期である（奈文研 2006）。

山田寺（浄土寺）

阿倍山田道に面して建てられた山田寺は、当時の境内地は南北 185 m、東西 117 m の境内地をもつ。現在は旧講堂上に法灯を伝える浄土寺がある。

山田寺は蘇我倉山田石川麻呂の発願により、舒明 13（641）年に造営、整地作業が開始された。その造営過程は、史料と発掘成果から詳細に判明している。南北 250 m、東西 150 m の範囲を平坦にするため、幾つもの尾根を削り、谷を埋めて、山田寺式の伽藍配置が造られている。2 年後の皇極 2 年（643）には金堂を起工し、大化 4（648）年には「始めて僧住む」という記事から、このころには金堂が竣工しており、僧房も完成していたことがわかる。また、発掘調査では金堂に続いて回廊・中門・大垣もこの頃に造営されたと考えられる。しかし、大化 5（649）年、石川麻呂が蘇我日向の讒言によって自害したことによって、その造営は頓挫する。その後、石川麻呂の無実が判明し、造営が再開されたのは天智 2（663）年になってからである。ここで「塔を構える」とあり、天武 2（673）年には「心柱を立てて舍利を納め」と、天武 5（676）年には「露盤をあげる」とあることから、塔の本格的な造営は天武 2 年まで下り、天武 5 年に完成したと考えられる。その後、天武 7（678）年に丈六仏像の鑄造が始まり、天武 14（685）年に開眼した。この仏像は後に興福寺へと持ち去られた仏頭であり、講堂に安置されていたものであることから、この頃には講堂も完成していた。と考えられる。7 世紀後半には金堂・回廊の瓦を補修し、南門及び大垣も建替えている。さらに僧房や宝蔵を建築している。これらの経緯は、発掘調査によっても判明しており、山田寺式（重圈文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦）・四重孤文軒平瓦を長期生産・使用し続けている。

文武 3（699）年には、30 年を限りに封三百戸が施入されており、大宝 3（703）年には四大寺（飛鳥寺・大官大寺・薬師寺・川原寺）などと共に、齋会が設けられており、四大寺に次ぐ、寺格を有していたことがわかる。しかし、奈良時代になると、石川麻呂の弟の連子の曾孫

である石川年足が大般若経一部を寺田からとして納めたことが知られる程度で、記録は少ない。8世紀中頃には回廊内を瓦敷にしたり、東北院を増設したりしており、8世紀後半～9世紀初頭にかけて小規模な屋根の修理が行われていた（奈文研 2002）。

安倍寺（崇敬寺）

安倍寺は上ツ道の西に接するところに位置する。『東大寺要録』に「崇敬寺、宇安倍寺、右安倍倉橋大臣建立也」とあり、寺号を崇敬寺で、阿部倉梯麻呂の建立である。一方、大化元年（645）に僧道昭が建立したとする伝承もあるが、道昭の帰国は斉明7年（661）なので、時期が合わない。

発掘調査によると、金堂・塔と北面及び西面回廊の一部が確認されており、法隆寺式伽藍配置と推定される。ただし、清水真一氏は、西面する四天王寺式伽藍配置を想定している（清水 1994）。各堂塔の所用瓦の詳細は明らかではないが、最も古いのは7世紀中頃の山田寺式瓦が出土していることから、この頃の創建とみられる（桜井市 1970）。

田中麿寺（法満寺か）

山田道の北方の平地部に位置する。樫原市田中町の法満寺境内に礎石があり、周辺から瓦が出土することから、法満寺周辺に寺跡が推定されている。地名から造営氏族は田中臣とみられ、舒明朝の田中宮も近辺に想定される。

法満寺西方にある「弁天の森」が金堂基壇と推定されているが、伽藍配置等は明らかではない。ただし、寺域は藤原京条坊施工に合わせて、変更されていることが判明している（樫原市 1993・竹田 1995）。出土瓦から見る限り、山田寺式瓦や重弧文軒平瓦の7世紀中頃に創建されたとみられ、藤原京造営に伴って、寺域が縮小し、奈良時代後半までは、建物があったと推定されている。

呉原寺（竹林寺）

呉原寺は、檜隈寺の東方の丘陵上にある。伽藍の位置については明確ではないが、丘陵部上に平坦面がいくつかみられ、堂塔が分散的に配置されていたと推定される。

呉原寺の創建については、保延5（1139）年の『大和国竹林寺別当譲状』には崇峻元（591）年に坂上大直駒子が建立したとされる。また、『清水寺縁起』では敏達天皇のために坂上大直駒子が建立したとする。いずれにしても「竹林寺」は呉原寺の後身寺院か法号と考えられ、渡来系の東漢氏の氏寺ということになる。記録に現われる初出は、康平元（1058）年の『大和国竹林寺解案』において呉原寺西大門という地名が残されているのみと記されている。

発掘調査では伽藍そのものを確認していないが、礎石の遺存や瓦の出土から、おおよその位置が推定されている。出土する瓦で最も古いのは、子葉に火炎文紋単弁蓮華文瓦があることから、7世紀中頃に創建されたものと考えられるが、先の記録とはややズレがある。次に8世紀初頭と後半の軒瓦が出土し、この頃にも伽藍の造営が続いていたか、改修が施されていたことが推測される。推定寺域の西端ちかくには7世紀末から8世紀中頃の土器を出土する溝が検出されており、土器構成からみて日常生活にかかわるものが多い。よって食堂院や僧房などが近在に推測されている（網干 1977・樫考研 2000）。

梓削寺（小島寺？）

梓削寺は、皇極3年（644）11月条「大臣、長直をして、大丹穂山に、梓削寺を造らしむ」とあるが、その場所は特定できていない。福山敏男は、梓削寺と法器山寺が同じとして、現在の小島寺がその後身であり、もとはその東方の高取町大字上小島字法花谷付近と推定されている。

遺跡名	法号・別名・推定寺院名	発願者・造営氏族	創建年代	備考
飛鳥寺	法興寺・元興寺・建通寺	蘇我馬子	①②④⑤⑥⑧⑩⑫	588年創建
豊浦寺	建興寺・豊浦尼寺・向原寺	蘇我馬子	①②③⑤⑥⑧⑨⑩⑫	603年以降 豊浦宮
和田廃寺	妙安寺・葛城寺・葛城尼寺	葛城臣那羅か	①③④⑤⑧⑫	
橘寺	菩提寺・橘樹寺・橘尼寺		①⑥⑧⑩⑫	
檜隈寺	道興寺	東漢氏	①⑥⑪⑫	
坂田寺	金剛寺・坂田尼寺	鞍作鳥・司馬達等	②⑤⑥⑦⑫	
立部寺	定林寺	平田忌寸	②⑧⑫⑬	
奥山廃寺	小墾田寺	小墾田臣 境部摩理勢	②③④⑤⑥⑦⑨⑫	
雷廃寺	高市大寺・大官大寺	天武天皇	②③⑧⑩⑫	
丈六南遺跡	厩坂寺		③	↓推古46寺
日向寺	矢口寺	矢口臣・蘇我日向臣	①(復古瓦)⑧⑫	
大窪寺		大窪史	⑤⑥⑧⑨⑪⑫	
軽寺	法輪寺	軽忌寸か	⑤ ⑧か	
吉備池廃寺	百濟大寺	舒明天皇	⑥	639年創建 百濟大寺
山田寺	浄土寺	蘇我倉山田石川麻呂	⑥⑨⑫	641年創建
安倍寺	崇敬寺	阿倍倉梯麻呂	⑥⑨⑫	
田中廃寺	法満寺か	田中臣	⑥⑧⑨⑫	
呉原寺	竹林寺	坂上直駒子 呉原忌寸	⑥⑫	
梓削寺	小島寺か	蘇我蝦夷	なし	
木之本廃寺	高市大寺か	天武天皇?	⑥⑩⑫	
川原寺	弘福寺	天智天皇	⑥⑧⑩	662年以降 川原宮
高田廃寺	高田寺	高田首新家か	⑧⑬	
石川廃寺	華嚴寺・石川精舎・石川寺	石川臣か	⑧⑫	
大福廃寺	大井寺か		なし	
膳夫寺		膳臣摩漏か	⑨⑫	
小山廃寺	紀寺	紀大人臣か	⑩⑫	↓京内24寺
本薬師寺	薬師寺	天武天皇	⑫	680年創建
塔垣内廃寺	山本寺か		なし	
久米寺		久米氏か	⑫	
八木廃寺	八木寺	八木造	⑫	
大官大寺		文武天皇	⑧⑨⑫	701年
下明寺遺跡	(旧醍醐寺)		なし	
香具山寺	興善寺		⑬	
岡寺	龍蓋寺	義淵僧正	⑫⑬	
青木廃寺		高階真人	なし	
朝風廃寺	竜福寺か	竹野女王	なし	

- ①花組(素弁蓮華文) 592～600年代 ②星組(弁端点珠素弁蓮華文) 592～600年代
③雪組(弁端点珠有稜素弁蓮華文) 610年代 ④奥山廃寺式(角端点珠素弁蓮華文)・細弁蓮華紋 610年代～620年代
⑤船橋廃寺式(素文縁素弁蓮華文)・軽寺式(素弁蓮華文) 630年代
⑥山田寺式(重圈文縁単弁蓮華文・創建) 640年代 ⑦坂田寺式(単弁八弁蓮華文) 640～650
⑧川原寺式(鋸齒文縁複弁蓮華文) 660年代 ⑨山田寺式(天武) 663～685 ⑩紀寺式(雷文縁複弁蓮華文) 676～680
⑪檜隈寺式(輻線文縁複弁蓮華紋) 672～686 ⑫藤原宮式・大官大寺式 680～710 ⑬岡寺式 690～710年代

木之本麿寺（高市大寺？）

香具山の西麓で、中の川左岸にある畝尾都多本神社周辺から古瓦が出土することから、木之本麿寺と仮称されている。和田萃氏が百済川と百済宮を藤原宮近くに比定したことから、百済大寺の候補地となっていたが、桜井市吉備にある吉備池麿寺が発見されたことにより、近年では高市大寺の候補地のひとつともされている。この神社の南側隣接地で奈良文化財研究所の新庁舎建設にともなう調査が実施されたが、直接寺院に関わる遺構は確認されていないものの、多くの瓦が出土している。

当遺跡出土瓦は、山田寺式・紀寺式・藤原宮式瓦が出土している。藤原宮に近接することから、すべてが木之本麿寺に伴うかは明らかではない。しかし、山田寺式の瓦が最も古く、吉備池麿寺との関連性が強いことから、高市大寺の候補地となるが、寺院の遺構がなく、中の川の水運を利用した荷揚げの可能性もある（奈文研 2017）。

VII. 初期寺院の系譜

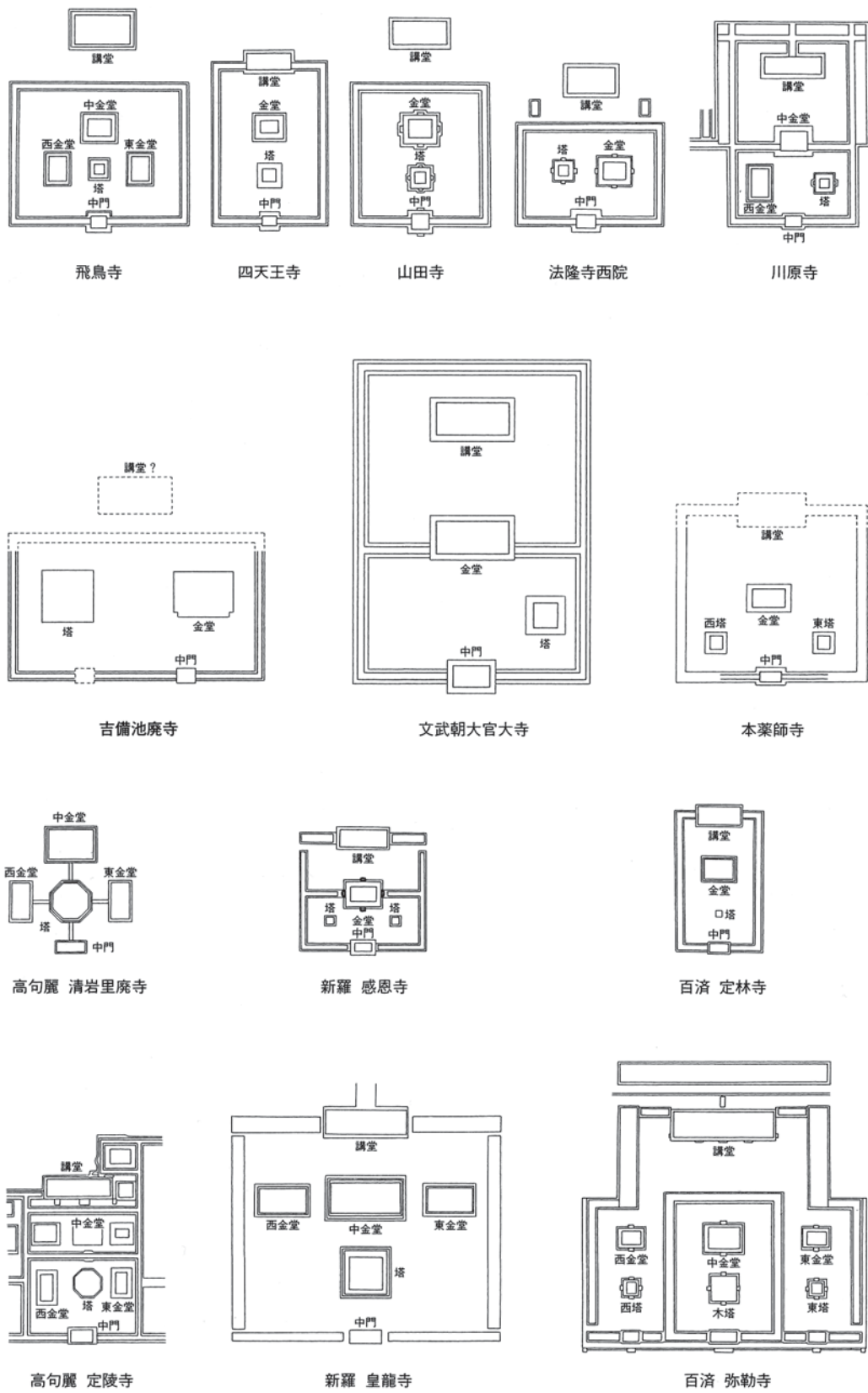
7世紀前半に創建された飛鳥地域の各寺院についての概要を記してきたが、ここでは初期寺院の特色について検討することにする。

古代寺院の造営期間

古代寺院の造営期間・経過などについては不明な点が多いが、史料により、いくつかの寺院で判明する事例がある。飛鳥寺についてはすでに記したので、次に明確な山田寺をみる。山田寺の造営過程は『日本書紀』『上宮聖徳法王帝説』（裏書）によってわかる。山田寺は舒明13年（641）に蘇我倉山田石川麻呂が発願し、造営が開始される。そして、皇極2年（643）に金堂を建立するが、大化5年（649）に石川麻呂は金堂で自害するので、造営は一時中断したと考えられる。この段階で金堂はほぼ完成しており、塔の造営にも着手していたようである。天智2年（663）には塔造営に着手するものの、進捗は遅く、心柱を立てたのは、天武2年（673）になってからである。そして、天武5年（676）に塔が完成する。天武14年（685）には丈六仏を開眼することから、講堂も完成していたことがわかる。これらのことから、山田寺の堂塔の造営は、途中で中断期間はあるものの、舒明13年（641）～天武14年（685）の44年をかけて、金堂→塔→講堂の順で建てられたことがわかる。

一方、豊浦寺では造営記事はないものの、史料から窺うことができる。豊浦寺の造営開始は、豊浦宮を寺にしたことから、小墾田宮遷宮の推古11年（603）が基準となる。ここで金堂の造営がはじまり、推古36年（628）条には山背大兄皇子が蘇我蝦夷を見舞うため、豊浦寺に居した（舒明即位前紀条）とあり、この段階である程度整っていたことがわかる。そして『聖徳太子伝暦』舒明6年（634）15日に「建豊浦寺塔心礎」とあり、塔の造営が進められていたことがわかる。さらに朱鳥元年（686）には無遮大会を行っているので、主要伽藍はこの頃に完成していたのであろう。このことから豊浦寺も推古11年（603）～朱鳥元年（686）の83年かけて、金堂→塔→講堂の順で建てられたことがわかる。

この二つの事例は、史料から造営の経過がわかるものであるが、両寺院の考古学的な調査においても、これらの造営過程が裏付けられている。そして、各堂塔の造営には、同時並行で建築されることもあるが、当時の一般的な（国の関与のない）寺院の場合、ほぼ10～20年程度の期間が必要であったと考えられる。これを考えると、飛鳥寺は、驚異的なスピードで造営が進んだことが特筆される。



第2図 日韓の伽藍配置の比較 (1:4000)

前期寺院と後期寺院

7世紀後半に堂塔が建てられ、伽藍が整備されたことが判明する寺院の中で、7世紀前半の瓦が一定量出土する遺跡がある。

檜隈寺は東漢氏の氏寺で、現在確認されている伽藍のうち、金堂及び中門は檜隈寺式瓦を葺く7世紀後半に建立されたことが明らかとなり、塔と講堂は藤原宮式瓦の7世紀末から8世紀初頭に建てられ、この頃に伽藍が整備されたことが明らかとなった(奈文研 1980・1981b・1982a・1983)。これは「檜隈寺・軽寺・大窪寺に各百戸を封ず。三十年を限る。」(朱鳥元年(686)8月21日条)の記事と整合すると考えられている。その一方で、花組や山田寺式瓦も出土しており、少なくとも7世紀初頭には瓦を葺いた建物があつたことが確実である。この時期の遺構は少ないが、L形カマドを持つ竪穴建物が近辺で確認されており、渡来系の建物と推定されている(奈文研 2010)。先の瓦との関係は明確ではないが、併存するものである。よって、7世紀初頭には瓦葺の仏堂や建物があつたが、その後、これらの建物を撤去して7世紀後半には、新たな伽藍が造営されたことになる。ここでは、前身となる仏堂を「前期寺院」として前期檜隈寺、これを壊して、新たに造営した大規模な伽藍を「後期寺院」として、後期檜隈寺と呼ぶことにする。

このような前期の仏堂を壊して、後期の伽藍を再建する事例は、滋賀県大津市の穴太廃寺でもみられる。ここでは、7世紀前半の素弁瓦を葺いた前期穴太廃寺(遺構は未確認で、出土瓦から推定)と、その後、周辺の地割に即して、単弁瓦・方形瓦を葺いた後期穴太廃寺創建伽藍が建てられる。さらに近江京遷都に合わせて、川原寺式瓦を葺き、同位置で正方位に建て替えられたのが後期穴太廃寺再建伽藍である(滋賀県 2001)。後期穴太廃寺の創建伽藍を再建伽藍に建て替えるのは、近江遷都の地割に合わせるという特殊事情があつたと考えられるが、前期寺院と後期寺院の関係は、先の檜隈寺の前期・後期寺院と共通する。

このような前期・後期寺院の関係は、和田廃寺や奥山廃寺・立部寺・坂田寺でも可能性を指摘することができる⁹⁾。

和田廃寺では遺構は未確認だが、船橋廃寺式瓦の葺かれた堂が建立され、続いて川原寺式瓦・高麗寺式瓦の塔が建てられたことが判明している。しかし、これに先行する花組・雪組・奥山廃寺式瓦も出土している。これらはいずれも先の堂塔よりも小型の瓦で、この段階での小規模な仏堂が推定される。この仏堂と、7世紀前半の掘立柱建物群との関係は明確ではない。掘立柱建物群の建物配置には、寺院を推定させる配置はみられない。このことから、7世紀初頭に建てられた仏堂を、7世紀中頃から後半に大規模な伽藍に建て替えられたと推定されている(奈文研 1975・1976a)。

一方、奥山廃寺では、金堂及び中門・回廊は奥山廃寺式瓦が葺かれ、塔は奥山廃寺式と素弁蓮華文が葺かれていたとされている(佐川 2000)。ここで注目されるのは、塔基壇の掘込事業よりもやや北にずれて一段階古い掘込事業があることである。塔以前の掘込事業を伴う建物がここにあつた可能性がある。さらに塔基壇内には7世紀前半の星組・雪組などの瓦が多量に含まれており、前身の建物にこれらの瓦が葺かれていたことを想定させる(奈文研 1988)。つまり、前期奥山廃寺の仏堂を壊し、後期奥山廃寺の伽藍を建立した可能性がここでも指摘できる。

さらに立部寺では、発掘調査があまり実施されておらず、出土瓦も少ないが、このうち最も古いのは星組瓦である。これに続くのは川原寺式瓦、そして藤原宮式・岡寺式瓦が続く。この中で星組瓦と川原寺式瓦の間には時間的な隔りがある。このことから、星組瓦の仏堂を壊し

て、川原寺式瓦以降に伽藍が整備された可能性もある。もっとも、星組瓦の仏堂をまず建てて、この建物を含めて整備した（伽藍整備に時間がかかった）可能性もあるが、後に検討する伽藍変遷からみて、その可能性は低いと考える。

坂田寺では、伽藍が判明しているのは、奈良時代中頃に整備した伽藍である。これは天平勝宝元年（749）に東大寺大仏殿東脇侍を寄進した信勝尼の活躍記事とも合致する。一方、7世紀の瓦も多く出土しており、最も古いのは星組瓦で、これにつづいて船橋廃寺式・山田寺式・坂田寺式・藤原宮式瓦と続く。これらは多くの型式の瓦が出土しており、時間的にも連続することから、ある程度の建物群（伽藍？）があった可能性がある。しかし、奈良時代になると、これらの建物を新しい伽藍に変更している。前期寺院に伽藍が想定される点は、これまでの小規模な仏堂とは異なる点であるが、ここでも前期・後期の関係がみられる。

初期寺院の伽藍

ここまでみた初期寺院のうち、伽藍配置が判明（推定）するものには、飛鳥寺・豊浦寺・奥山廃寺・坂田寺（奈良時代）・立部寺・橘寺・檜隈寺・吉備池廃寺・山田寺・安倍寺・軽寺がある。これらは飛鳥寺が一塔三金堂式、豊浦寺・奥山廃寺・橘寺・山田寺が四天王寺式あるいは山田寺式、吉備池廃寺・安倍寺・軽寺が法隆寺式、立部寺・檜隈寺と奈良時代の坂田寺は特殊な配置である。

これまで基本的には7世紀初頭の寺院は、直線的な百済式が多く、百済大寺以降には法隆寺式などの伽藍配置が出現する。これは斑鳩の法隆寺が、創建段階（若草伽藍）は四天王寺式であったものが、火災焼失後に再建した伽藍は、法隆寺式（西院伽藍）になることから、大きな変遷としては肯定される。しかし、必ずしもそうでない場合も指摘されてきた。飛鳥寺の伽藍配置の系譜については、すでに検討したところであるが、7世紀初頭の伽藍配置については、百済式が多いことはすでに指摘されている。しかし、この中では創建時期が古いにも関わらず、立部寺などは百済式でない寺もある。ここで先の前期寺院・後期寺院の理解を入れると、スムーズに理解できる。つまり、創建段階の仏堂のみの前期立部寺を壊し、川原寺式瓦を葺く後期立部寺に伽藍を整備し直すと考えられる。これにより、百済式でない伽藍において、7世紀初頭の瓦が出土することをスムーズに理解できる。そして、吉備池廃寺（639年創建）で、はじめて法隆寺式伽藍が採用され、それは安倍寺でも採用された。また、檜隈寺・坂田寺が特殊な伽藍配置をするのは、山間部の丘陵上という立地上の制約と、渡来系の氏寺ということが関係しよう。

初期寺院の前半と後半

このように初期寺院の伽藍配置をみると、吉備池廃寺・山田寺を境に変化がみられる。それまで百済式の伽藍が主流であるが、これ以降、法隆寺式などの伽藍が増える。

四天王寺式（山田寺式）は、中門を入ると、まず塔があり、その奥に仏像を安置する金堂が配置される。飛鳥寺もそうであるが、これは仏舎利を安置する塔を中心に据えた伽藍配置であり、明らかに金堂よりも優位なことを意味している。これに対して、吉備池廃寺ではじめて、金堂と塔が東西に併存する法隆寺式が現れる。これは中門から入ると、塔と金堂が同時に見えることから、両者が同格になったことを意味している。中門が金堂・塔前に二つ推定される（奈文研2006）のは、塔・金堂の両方を重視する画度期か。さらに次の川原寺式伽藍配置になると、

東西に塔と西金堂が併置されるが、さらに正面奥に中金堂を配置する一塔二金堂式となる。これにより、塔よりも金堂の優位性が高くなったことを示唆している。

このように伽藍の中心施設が、塔→塔・金堂→金堂への変化が読み取れる。このような変化は、吉備池廃寺・山田寺あたりを境にみられる。吉備池廃寺は百濟大寺と考えられており、舒明天皇が舒明11年(639)に発願した寺院である。一方の山田寺は蘇我倉山田石川麻呂が舒明13年(641)に発願した寺院である。この時に伽藍配置も決められたと考えられるが、この2年の差は誤差の範囲内とみることもできよう。あるいは天皇発願の吉備池廃寺が先行して、新しい伽藍配置を導入したとも考えられる。いずれにしても、舒明朝末年に寺院の意識が変わったことを示唆する。このことは、瓦当文様でも追認でき、それまでの素弁蓮華文が単弁蓮華文軒丸瓦にかわるのも山田寺式瓦の出現からで、段顎の重弧紋の軒平瓦の出現もこの頃である(納谷2005)。このように、伽藍配置や瓦文様の変化が、初期寺院の前半(第1期)と後半(第2期)を区分する画期となる。

百濟大寺の位置づけ

先にみたように、新様式伽藍の登場や単弁軒丸瓦・段顎付軒平瓦の出現によって、初期寺院は前半と後半に区分できる。その画期に位置づけられるのが、百濟大寺(吉備池廃寺)である。伽藍様式の変化は信仰対象の変化とリンクしているが、それだけでなく、吉備池廃寺は初めての天皇勅願寺院であることに最大の特色がある。それまで、氏族に対して、君臣統合の象徴として天皇の為に寺院の建立を促していたが、天皇勅願寺の建立は、天皇が自ら国家のシンボルとして巨大な寺院を建立したのである。そして、「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」(舒明11年(639)7月条)とあるように、東国の仕丁を動員したことからも、一氏族のレベルを超えたものであった。それは九重塔にも代表される。九重塔は、北魏洛陽の永寧寺・百濟益山の弥勒寺・新羅慶州の皇龍寺にも建てられた東アジアの国家寺院のスタンダードであった。しかし、この段階では、国家のシンボルを意識しながらも、あくまでも天皇勅願寺の域を脱し得ず、その建立場所も、王都である飛鳥ではなかった。国家が王都に造営する国家寺院とは一線が画される。この百濟大寺の造営は、皇極天皇にも引き継がれており、造営は継続されている。そして、百濟大寺の法灯を受け継ぐものとして、大官大寺が王都における国家寺院へと確立していくのである。

初期寺院の立地

これらの初期寺院の立地には、ある特色がみられる。まず幹線道路沿いに寺院が配置されることである。特に、阿部山田道沿いには、西から丈六南遺跡・軽寺・田中廃寺・和田廃寺・豊浦寺・飛鳥寺・奥山廃寺・山田寺と安倍寺が並ぶ。これらの寺院は計画的に配置されているものではなく、氏族の本拠地にある居宅を寺院にしたり、あるいは居宅の隣接地に寺院を建立することに由来する。このことは、「寺」のはじまりが、居宅に仏像を祀る、あるいは居宅内に仏堂を建てることに由来することからもつながる。つまり、古道を中心に氏族は本拠を構えたことから、必然的に、寺院も古道沿いに並ぶことになったのである(大脇1997)。

これとは別に、飛鳥南部の丘陵地域に寺院が造られる事例がある。坂田寺・立部寺・檜隈寺・呉原寺などである。これらは鞍作氏・平田氏・檜隈氏・坂上氏と、いずれも渡来系氏族の寺院である。坂田寺の奈良時代の伽藍については、傾斜のきつい斜面地を造成して整備しており、

立部寺・檜隈寺・呉原寺などは丘陵上を平坦化して伽藍を造る。特に、檜隈寺が建立された丘陵の隣の尾根上には檜前大田遺跡があり、檜隈氏の居宅と推定されている（明日香村 2013）。また、定林寺の南の尾根上にも平坦面がみられ、ここに定林寺の造営に関わった平田氏の居宅があった可能性がある。いずれにしても、渡来系氏族の寺院は、丘陵部の尾根上に造営されることが多く、その立地故に、変則的な伽藍配置になったと考えられる。このことは、渡来人が平野部ではなく、檜隈をはじめとした、丘陵部に移植させられたことが想定できよう。

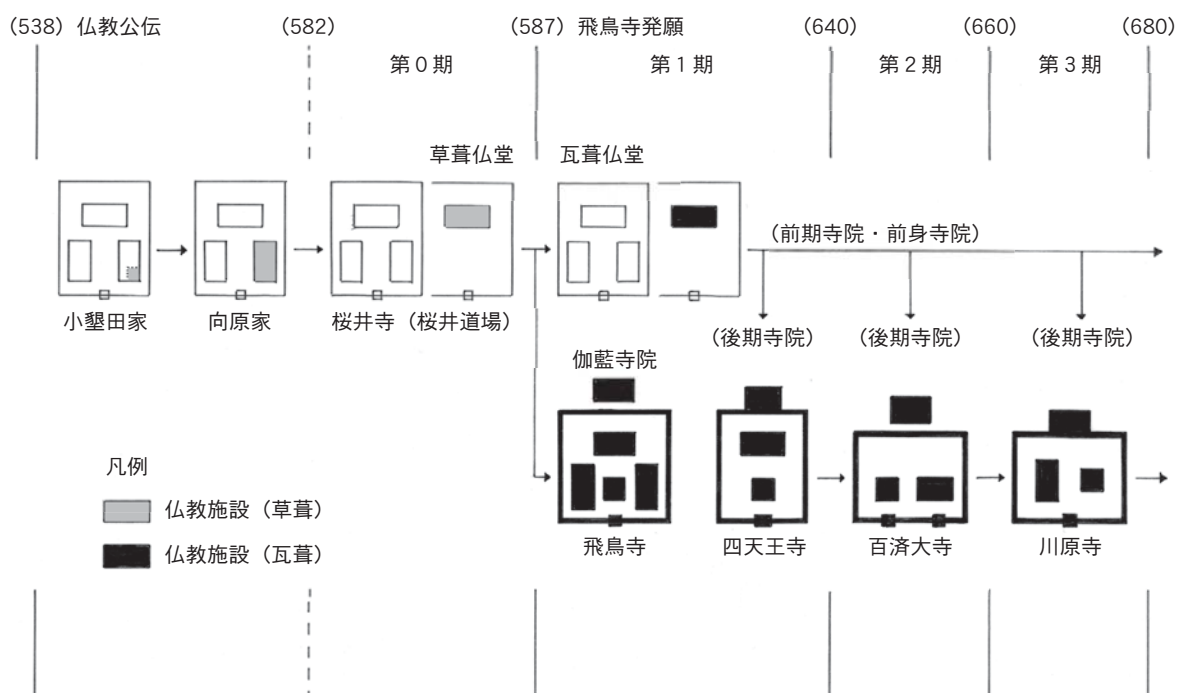
また、異例の立地としては吉備池廃寺がある。ここは、古道からは一定の距離があり、幹線道路沿いとは言えない。また、先にみたような丘陵部ではなく、平地にあり、寺院の敷地としては広大な面積が確保できる。吉備池廃寺の地は「百済」と呼ばれており、磐余にも近く、王権ゆかりの地でもある。天皇の勅願寺であるがゆえ、このような好地を確保できたのであろう。

前期寺院と史料上の「寺」

初期寺院において、伽藍建立以前の瓦を出土するものについては、前期・後期寺院に区分が可能となった。ここでは、史料でみたように瓦を用いない仏堂などの「寺」と、その後伽藍をもつ「寺院」の関係も検討する。

「小墾田家」は居宅に仏像を祀るとする（欽明 13 年（552）10 月条）だけで、仏堂ではないと思われる。これと小墾田寺と推定される奥山廃寺との関係が問題となるが、前期奥山廃寺は 7 世紀初頭の瓦葺仏殿で、時間的にも、建物構造的にも直接的には関係が認められない。ただし、蘇我氏の居宅を後に寺院としたことは想定され、居宅内での宗教施設を基にして、後に居宅あるいは隣接地に奥山廃寺を建立したのであろうか。

一方、「牟久原殿」は、居宅建物の一部あるいは建物を改修して、仏堂として、仏像を祀っている。この牟久原殿は、豊浦寺の前身ともされるが、この豊浦寺は豊浦宮の跡地に建立されたことがわかっている。豊浦宮については、崇峻天皇暗殺後 1 ヶ月後に即位遷宮していること



第3図 初期寺院の変遷

から、蘇我氏の向原家（牟久原殿）を豊浦宮とした可能性が高い。このことから、向原家→豊浦宮→豊浦寺の流れが考えられる。

「石川の宅の仏殿」（敏達13年（584）是歳条）は、仏像専用の建物に改修した可能性がある。この推定地には石川廃寺があるが、発掘調査が進んでいないので、伽藍は明らかではない。しかし、瓦から見る限り、7世紀後半の建立であり、石川の宅史料との時間的距離は大きい。ただし、居宅をあるいはその隣接地を後に寺院にすることは可能である。

「桜井寺」は、牟久原の家を桜井に遷す。翌年にこれを桜井道場としたとある（元興寺縁起）。ここでも仏教の修行を行う建物（道場）があったことがわかる。その場所は、豊浦寺の西方に推定される（相原2018）が、遺跡としては明確ではない。その後に伽藍寺院として整備された痕跡も、現在の所みられない。ただし、桜井寺は、豊浦寺の前身との史料（元興寺縁起）もあり、史料上錯綜している。

「坂田草堂」は、『扶桑略記』欽明13年（552）10月13日条に草堂に仏像を安置した記事がみられる。坂田原に瓦を葺かない仏堂があったことになる。坂田寺の創建は、瓦から見る限り7世紀初頭まで遡り、ここから伽藍が造営されていく（前期坂田寺）。この草堂は、年代的には、前期坂田寺の前身となる草堂であった可能性は高い。

このように7世紀の寺院に先行する「寺」（道場・草堂など）が、伽藍寺院の前身となる可能性は高い。しかし、史料上の仏堂と、瓦を葺く仏堂（前期寺院）の関係であるが、これは明確ではない。史料の記載年代と瓦の年代に一致するものがないからである。当然史料に残らない「寺」もあったであろう。ここでの課題は瓦葺仏堂の「寺」である。伽藍を持たない前期寺院が、瓦葺の「寺」であった可能性はのこされる。これは、前期寺院の「仏堂」の発掘調査における解明が必要であろう。ここでは、「寺」→「前期寺院」→「後期寺院」の変遷モデルを提示しておきたい。

前期寺院の性格

最後に、これまでの検討を踏まえて、前期寺院の性格について検討しておきたい。ここまで前期寺院を伽藍を持たない瓦葺仏堂として、伽藍寺院建立の前身施設として、単独の仏堂であると推定してきた。それは伽藍が整備されるよりも古い瓦が出土することから推定してきた。しかし、このような事例は、他の可能性も推定される。史料でみたように、居宅の一部に瓦葺仏堂を建てる場合である。所謂、（一部）捨宅寺院である。氏寺は、居宅に隣接して建てることが多い。そのため、まず居宅内に仏堂を建て、その後、居宅を壊して、伽藍寺院を造営した可能性である。

居宅内に瓦葺建物を建てる事例を示唆する成果がある。蘇我馬子の居宅である嶋家に推定されている島庄遺跡では、方形池の中や周辺から花組瓦が出土している。瓦を葺いた建物は確認されていないが、嶋家に瓦葺建物が存在したと思われる（檀考研1974）。また、蘇我蝦夷の居宅である豊浦家に推定される古宮遺跡でも花組・星組・雪組が出土している（奈文研1974・1976b）。そして、甘樫丘東麓遺跡でも瓦が出土しており、やはり瓦葺建物の存在を示唆する。ここで注目されるのは、これらの遺跡から出土した瓦が飛鳥寺・豊浦寺と同範・同系の瓦であることである。いずれも蘇我氏に関わる居宅・寺院であり、蘇我氏との密接な関係を示している（相原2016・清水2017）。このように蘇我氏の邸宅内に瓦葺建物があつた可能性は高く、それが仏教施設（仏堂）であつた可能性もある。さらに、先に紹介した難波長柄豊碕宮（前期

難波宮) や斑鳩宮 (法隆寺東院下層)・岡本宮 (法起寺下層) でも瓦が出土しており、宮殿内に仏堂や仏教施設があった可能性も推定されている。

このように居宅内に仏堂を建てた事例があり、居宅を捨宅して寺院を建立すると、前期・後期寺院の調査成果と同一の現象となる。ここで問題となるのは、居宅をすべて廃して、寺院を建立するかである。確かに、豊浦宮や斑鳩宮、岡本宮の跡地に、豊浦寺・法隆寺東院・法起寺を建立しているが、この場合、宮の主人が、そこに居なくなったケースである。つまり、氏族の場合、居宅のすべてを寺院にするためには、別の場所に居を遷さなければならない。この事例になりそうなのが、檜隈寺である。檜隈寺では7世紀前半の瓦が出土するが、その隣接地で、竪穴建物が確認されている。他の建物は未確認であるが、同一丘陵上に居宅があった可能性がある。これに対して、7世紀後半の伽藍を建立する時期には、隣接する丘陵上(檜前大田遺跡)に居宅を構えている。伽藍寺院を造営するために、隣接する丘陵に居宅を遷したとも考えられよう。

このように、前期寺院には、二つの解釈が可能であるが、いずれとも決しがたい。瓦の出土から前期寺院を推定しているだけで、その瓦に伴う建物が未確認だからである。おそらく、個々の遺跡における詳細な検討が必要であろう。

VIII. 総括－我が国における仏教寺院の導入－

本稿では、我が国における仏教寺院の導入を探るため、東アジア仏教の伝播や、我が国への仏教導入、飛鳥寺以前の仏教施設の実態、飛鳥寺の造営とその系譜、初期寺院の変遷などを整理してきた。ここではこれらを段階的に再整理し、仏教寺院導入の意味を提示しておきたい。

東アジアの仏教政策

中国における仏教政策は、民衆の仏教信仰心を権力に取り込むことにより、統治の手段、国家形成の手法として、国策として導入された。さらに中国の影響力は大きく、周辺国を冊封し、中華を中心とした支配に進んでゆく。これら中国をはじめ、その周辺諸国では、律令・漢字・仏教を共有する東アジア文化圏が形成され、国際交渉に仏教を利用してきた。それは朝鮮半島の三国(高句麗・百済・新羅)も同様である。

第0期 (538～588)

仏教公伝以降、飛鳥寺創建までの段階を、前史として第0期とする。この中で、倭国にも百済を通じて仏教が538年に公伝するが、飛鳥寺創建までの約50年間、仏教崇拝に対して、天皇は中立の立場にたち、公認はしなかった。このことは百済が倭国を東アジア文化圏に取り込み、中国に対して優位にたとうとする意図とは反して、倭国には国家形成の指標としての、律令・漢字・仏教の認識が薄かったこと、そして仏教を受け入れる土壌が十分には成熟していなかったことによる。結局、蘇我稲目にのみ、仏像と経典を託し、その後、崇仏・排仏は、蘇我・物部の武力抗争へと発展していく。この間の「寺」は、居宅を増改築して仏教施設としたものであり、あくまでも個人的な仏教崇拝の段階であることがわかる。

第1期 (589～630年代)

第1期は飛鳥寺創建を契機とする。飛鳥寺が建立されると、推古2年2月1日条「三宝を興し隆えしむ」にあるように、推古天皇が仏教を公認し、仏教興隆の詔をだす。そして「各君親の恩の為に、競ひて仏舎を造る」とあるように、氏族たちが競って寺院の造営をはじめた。飛鳥寺の造営により、個人崇拝から氏族の崇拝へと変化し、同時に、寺院造営の最新の知識・技

術が百済・高句麗からもたらされたのである。しかし、この段階においても天皇自らが寺院を建立することはなかった。寺院は氏族たちが天皇・先祖のために建立するものであり、権力者にとっては、君臣統合の象徴でもあった。

この段階の寺院は、伽藍をもつ瓦葺建築となっている。その伽藍配置は、塔を重視した直線の配置であり、百済様式の採用ともみられる。飛鳥寺は高句麗の影響が強いものの、塔を中心とした伽藍であることは違いない。しかし、伽藍の造営には、莫大な財源と時間が必要となる。そのため、瓦葺仏堂ひとつを造るだけのもの（前期寺院）もあり、これは後に伽藍寺院（後期寺院）へと整備される。

第2期（640年代～650年代）

第2期は、百済大寺創建を契機とする。舒明11年（639）、天皇勅願の寺院である百済大寺を発願する。この段階において天皇が自ら寺院を発願し、その堂塔並びに伽藍規模は、それまでの寺院とは比較にならないほど大規模なものであった。特に九重塔は、東アジアの国家寺院のスタンダードであった。さらに、百済大寺建立にあたり、東国の労働力が動員された。それまでの氏族による寺院造営だけでなく、天皇の寺造営に仕丁に通じる労働力が動員された点においても画期的であった。舒明天皇は、東アジアに通じる寺院の創建を目指したのである。国家の統治に、東アジア宗教である仏教を積極的に導入しようとした。しかし、百済大寺は都の寺ではなく、まだ、国家の首都寺院とはなっていない。この時期を境に、法隆寺式伽藍配置が出現する。これは、塔と金堂が対等の位置づけになったことを表す。寺院の崇拜対象が仏舎利から仏像へと移ってきたのである。また、軒丸瓦文様が、素弁から単弁への変化、段顎の軒平瓦の出現もこの頃にあたる。その先駆けとなったのが百済大寺であった。

これ以降、第3期（660年代～670年代）、第4期（680年代～730年代）と続き、仏教伝来→飛鳥寺→百済大寺→川原寺→条坊寺院に、それぞれの画期を認められるが、これについては別稿にて検討したい。

飛鳥寺創建の意義

飛鳥寺は、我が国はじめての本格的伽藍をもつ寺院である。これを契機として、仏教を天皇が公認し、氏族に対しても仏教興隆の詔をだしている。これは仏教寺院を君臣統合の象徴とし、氏族に対して建立を促したものである。しかし、この段階では、東アジア文化圏における倭国の寺院としての位置づけまではできていない。

この仏教という最新の文化と同時に、最新の建築技術も導入されることになった。基壇上の礎石建築、瓦葺建物など、我が国にはまだなかった技術である。これらの技術を先導する師匠が来日し、これに師従する職人が育成され、その後の寺院造営の基礎となった。これらの技術や知識は、直接的には百済と高句麗からもたらされ、飛鳥寺も両国からの僧侶が居住していたのである。これらは、発掘成果からも追認できる。瓦文様・建築様式・塔埋納品などは、百済に近く、伽藍配置は高句麗式である。さらに仏教も中国から朝鮮半島を経てもたらされた。それに加えて、古墳時代からの流れを組むものも含まれている。飛鳥寺の創建は、当時の国際交流を明瞭に表し、日本の伝統と外来文化の融合をここにみることができる。

そして、飛鳥寺の創建は、その後の飛鳥の都市形成においても重要な定点となっていた。飛鳥寺の場所は、龍門山地・多武峰と甘樫丘に囲まれた小さな盆地状の、北の狭まった入口にあたる。なぜ盆地の中央ではなかったのか、それには二つの理由が推定される。ひとつは古道「古

山田道」に南接した場所であることである。古道に面して居宅を配し、寺院を造営するが、飛鳥寺に北接して小墾田宮も造営される（相原 2013）。古山田道沿いに、飛鳥寺が造られたことにより、王宮も隣接して造営されたのである。もうひとつは、当時、飛鳥寺南方は未開の地であったが、舒明朝以降、そこには王宮（飛鳥宮）が継続して建てられる。つまり、飛鳥寺を盆地の入口に配置することにより、飛鳥盆地が強固な要塞と化し、飛鳥宮の地が一等地の空間になるのである。

このように飛鳥寺の創建には、様々な意義がある。斉明～天武朝になると、飛鳥寺西地域（石神・水落・飛鳥寺西方遺跡）では化外民に対する服属儀礼や饗宴など、饗給の空間となった。それは時を告げる漏刻も、時間を支配することにより、夷狄を服属させる意味をもち、須弥山も天下の中心を示す象徴であった。ここは天下を治める飛鳥の中心と位置づけられたのである（相原 2014）。この意味でも君臣統合の象徴でもある飛鳥寺が、この地に創建された意義は大きい。

（令和元年 12 月 29 日稿了）

註

- 1) 飛鳥寺の名称については、『日本書紀』には崇峻即位前紀（587）～天智 10 年（671）までは「法興寺」の名称が、斉明 3 年（657）から持統 2 年（688）は「飛鳥寺」の名称が使用されている。厳密には、斉明 3 年 7 月 15 日条のみが異様に早く、ほかは天武～持統朝である。『続日本書紀』以降の正史には「飛鳥寺」の別名としては「法興寺」は 1 例のみ（養老 2 年 9 月 23 日条）で、他の 44 例はすべて「元興寺」とする。
- 2) 『日本書紀』『続日本紀』の書き下し文は岩波書店の『日本古典文学大系 日本書紀』及び『新日本古典文学大系 続日本紀』による（特に記載のないものは紀・続紀による）。『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』の書き下し文は岩波書店の『日本思想体系 寺社縁起』による。『上宮聖徳法王帝説』の書き下し文は岩波書店『上宮聖徳法王帝説』（東野治之校注）による。ただし、旧字体は新字体に改めた。
- 3) 本稿では、東アジア文化圏の範囲を、北東アジア・東アジア・南アジアの中国を中心とした律令・漢字・仏教を共有する文化圏をさす（李 2000）。
- 4) 本稿では、寺院名など固有名詞を除いて、伽藍をもつ寺を「寺院」、伽藍をもたない寺を「寺」として区別する。
- 5) 報告書では「小型瓦」と呼称しているが、屋根に葺く小型の瓦と識別するため、ここでは「ミニチュア瓦」と呼称する。
- 6) 掘立柱建築で、瓦を葺く（一部）建物は、仏教施設とみることが多いが、小笠原好彦氏は外交使節の迎賓館でも瓦を使用しているとみている（小笠原 1999）、筆者もこの可能性があることを支持している（相原 2013）。
- 7) 『元興寺縁起』によると、推古 17 年（609）「丈六仏像完成。元興寺におさめる」とある。
- 8) 中国では今のところ双塔式の伽藍は確認されていない。しかし、文献等によると、南北朝から双塔式伽藍がみられる（向井 2019）。
- 9) このような事例は只塚廃寺・中宮寺・平隆寺でもみられ、同様の指摘を清水昭博氏も指摘している（清水 2017）。

参考・引用文献

- 相原嘉之 2013 「飛鳥寺北方域の開発－7 世紀前半の小墾田を中心として－」『橿原考古学研究所論集 第十六』八木書店
- 相原嘉之 2014 「飛鳥寺西の歴史の変遷－飛鳥における『天下の中心』の創造－」『万葉古代学研究年報 第 12 号』奈良県立万葉文化館
- 相原嘉之 2016 「甘樫丘をめぐる遺跡の動態－甘樫丘遺跡群の評価をめぐって－」『明日香村文化財調査研究紀要 第 15 号』
- 相原嘉之 2018 「古代飛鳥地名考－王都飛鳥における地域名称の復元試論－」『泉森皎先生喜寿記念論集』泉森皎先生喜寿記念会
- 青木 敬 2017 『土木技術の古代史』吉川弘文館
- 飛鳥資料館 1983 『渡来人の寺－檜隈寺と坂田寺－』
- 飛鳥資料館 1984 『小建築の世界』

- 明日香村 2006 『続明日香村史 上巻』
- 明日香村教育委員会 2000 「1998-14 次 坂田寺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成 10 年度』
- 明日香村教育委員会 2013 『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書－国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業に伴う調査－』
- 東潮・田中春明 1988 『韓国の古代遺跡 1 新羅篇（慶州）』中央公論社
- 東潮・田中春明 1989 『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社
- 東潮・田中春明 1995 『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社
- 網干善教 1977 「呉原寺（竹林寺）とその遺跡・遺物」『仏教史学論集』二葉憲香博士還暦記念会
- 網干善教 1980 「飛鳥と仏教文化」『古代の飛鳥』学生社
- 諫早直人 2017 「飛鳥寺の発掘と塔心礎埋納品－飛鳥寺発掘 60 年－」『飛鳥・藤原京を読み解く－古代国家誕生の軌跡－』奈良文化財研究所
- 石井公成 2019 『東アジア仏教史』岩波書店
- 石田茂作 1956 「伽藍配置の変遷」『日本考古学講座 第 6 巻』河出書房
- 伊藤敬太郎 1999 「うつされた塔心礎－大窪寺と山本寺－」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 伊藤敬太郎・竹内亮 2000 「飛鳥池遺跡出土の寺名木簡について」『南都佛教 第 79 号』南都仏教会
- 井上 薫 1961 「日本書紀仏教伝来記載」『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館
- 大阪市文化財協会 2004 『難波宮址の研究第十二－宮殿周辺地域の調査－』
- 大野城市教育委員会 1993 『牛頭月ノ浦窯跡群』
- 大橋一章 2012 「飛鳥寺本尊丈六釈迦三尊像の制作年代について」『シンポジウム文化財の解析と保存へのアプローチ IX 飛鳥寺特集』早稲田大学奈良美術研究所
- 大脇 潔 1989 『日本の古寺美術 14 飛鳥の寺』保育社
- 大脇 潔 1995a 「大安寺 1－百済大寺から大官大寺へ－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所
- 大脇 潔 1995b 「寺院址調査の成果と課題－飛鳥地域を中心として－」『展望考古学』考古学研究会
- 大脇 潔 1997 「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 大脇 潔 2005 「軽寺考－軽寺とその周辺の遺跡－」『古代東国の考古学－大金宣亮氏追悼論文集－』慶友社
- 大脇 潔 2010 「飛鳥・藤原京の寺院」『古代の都 1 飛鳥から藤原京へ』吉川弘文館
- 小笠原好彦 1999 「高麗寺の性格と造営氏族」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 小笠原好彦 2005 「穴太廃寺の性格と造営氏族」『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版（初出 2004）
- 小澤 毅 1995 「小墾田宮・飛鳥宮・嶋宮－七世紀の飛鳥地域における宮都空間の形成－」『文化財叢 II』奈良国立文化財研究所
- 小澤 毅 2018 「百済大寺の比定とその沿革」『古代宮都と関連遺跡の研究』吉川弘文館（初出 2003）
- 橿原市教育委員会 1993 「田中廃寺（第 2 次）の調査」『橿原市埋蔵文化財発掘調査概報 平成 4 年度』
- 橿原市千塚資料館 1992 『橿原の飛鳥・白鳳寺院』
- 橿原市千塚資料館 1999 「軽寺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる 6』
- 春日市教育委員会 1985 『春日地区遺跡群 III』
- 亀田修一 1981 「百済古瓦考」『百済研究 12』忠南大学校百済研究所
- 亀田修一 2000 「百済軒丸瓦の製作技法」『古代瓦研究 I－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良文化財研究所
- 亀田修一 2009 「朝鮮半島における造瓦技術の変遷」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』
- 亀田 博 1997 「橘寺の沿革と伽藍」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 河上麻由子 2019 『古代日中関係－倭の五王から遣唐使以降まで－』中央公論新社
- 河内春人 2012 「遣隋使の『致書』国書と仏教」『遣隋使がみた風景－東アジアからの新視点－』八木書店
- 窪添慶文 2010 「南北朝時期の国際関係と仏教」『古代東アジアの仏教と王権－王興寺から飛鳥寺へ－』勉誠出版
- 氣賀澤保規 2012 『隋書』倭国伝からみた遣隋使『遣隋使がみた風景－東アジアからの新視点－』八木書店
- 国立慶州文化財研究所 2005 『芬皇寺発掘調査報告書 I』
- 古代瓦研究会 2000 『古代瓦研究 I－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良文化財研究所

- 古代瓦研究会 2005『古代瓦研究Ⅱ－山田寺式軒瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所
- 古代瓦研究会 2009a『古代瓦研究Ⅲ－川原寺式軒瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所
- 古代瓦研究会 2009b『古代瓦研究Ⅳ－法隆寺式軒瓦の成立と展開－・－雷文縁・幅縁文縁・重圈文縁複弁蓮華文軒丸瓦の展開－』奈良文化財研究所
- 古代瓦研究会 2010『古代瓦研究Ⅴ－重弁蓮華文軒丸瓦の展開－・－藤原宮式軒瓦の展開－』奈良文化財研究所
- 齋部麻矢 2000「九州における初現期の瓦」『古代瓦研究Ⅰ－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所
- 狭川真一編 2004『解体修理で下ろされた建築部材の基礎的研究』平成 13～15 年度科学研究費補助金（基板研究 C）研究成果報告書
- 佐川正敏・西川雄大 2000「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所
- 佐川正敏 2009「中国における造瓦技術の変遷－粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換を中心に－」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』
- 佐川正敏 2010「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎配置・舍利奉安型式の系譜」『古代東アジアの仏教と王権－王興寺から飛鳥寺へ－』勉誠出版
- 佐川正敏 2012「南北朝時代から明時代までの造瓦技術の変遷と変革」『古代 第 129 号』早稲田大学考古学会
- 桜井市 1970『安倍寺跡環境整備事業報告－発掘調査報告－』
- 櫻庭祐介 2012「飛鳥寺本尊丈六釈迦三尊像の X 線分析について」『シンポジウム文化財の解析と保存へのアプローチⅨ 飛鳥寺特集』早稲田大学奈良美術研究所
- 櫻庭祐介 2013「飛鳥寺本尊丈六釈迦三尊像について」『奈良美術研究 第 14 号』早稲田大学文学研究科 奈良美術研究所
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1997『穴太遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2001『穴太遺跡発掘調査報告Ⅳ』
- 清水昭博 2012『古代日韓造瓦技術の交流史』清文堂
- 清水昭博 2017「蘇我氏の邸宅と瓦－畝傍の家と橿原遺跡の瓦－」『帝塚山大学考古学研究所報告 XX』
- 清水真一 1994「安倍寺跡」『埋文センター 5 年のあゆみ』桜井市文化財協会
- 末永雅雄 1961『橿原』奈良縣教育委員会
- 藪田香融 2016「東アジアにおける仏教の伝来と受容－日本仏教の伝来とその史的的前提－」『日本古代仏教の伝来と受容』塙書房（初出 1989）
- 竹田政敬 1995「平松廃寺－前身寺院は飛鳥に－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所
- 太宰府町教育委員会 1979『神ノ前窯跡』
- 田中俊明 2019「新羅王京寺院の伽藍配置について」『古代寺院史研究』思文閣
- 田村吉永 1960「百済大寺と高市大寺－大安寺成立に関する一見解－」『南都仏教 第 8 号』南都仏教会
- 千田 剛 2015『高句麗都城の考古学的研究』北九州中国書店
- 富田林市教育委員会 2003『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』
- 納谷守幸 2005「軒丸瓦製作手法の変遷－飛鳥地域出土の 7 世紀前半の資料を中心に－」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会（初出 2004）
- 奈良県立橿原考古学研究所 1974『嶋宮傳承地－昭和 46～48 年度発掘調査概報－』奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所 1995「豊浦寺金堂跡の調査」『奈良県遺跡調査概報 1994 年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1998「豊浦寺第 3 次調査」『奈良県遺跡調査概報 1997 年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1999『橘寺』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2000「呉原寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1999 年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999『蓮華百相－瓦からみた初期寺院の成立と展開－』
- 奈良国立文化財研究所 1958『飛鳥寺発掘調査報告』
- 奈良国立文化財研究所 1973「坂田寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 3』
- 奈良国立文化財研究所 1974「小墾田宮推定地の調査 2」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 4』

- 奈良国立文化財研究所 1975「和田廃寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 5』
- 奈良国立文化財研究所 1976a「和田廃寺第2次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 6』
- 奈良国立文化財研究所 1976b「小墾田宮推定地の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I』
- 奈良国立文化財研究所 1978「定林寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』
- 奈良国立文化財研究所 1980「桧隈寺第1次（南門）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 10』
- 奈良国立文化財研究所 1981a「豊浦寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 11』
- 奈良国立文化財研究所 1981b「桧隈寺第2次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 11』
- 奈良国立文化財研究所 1981c「坂田寺第3次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 11』
- 奈良国立文化財研究所 1982a「桧隈寺第3次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 12』
- 奈良国立文化財研究所 1982b「日向寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 12』
- 奈良国立文化財研究所 1983「桧隈寺第4次（門・東回廊跡）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 13』
- 奈良国立文化財研究所 1986「豊浦寺第3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 16』
- 奈良国立文化財研究所 1987「桧隈寺第5次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 17』
- 奈良国立文化財研究所 1988「奥山久米寺の調査（1987-1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 18』
- 奈良国立文化財研究所 1990「奥山・久米寺の調査（1989-1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 20』
- 奈良国立文化財研究所 1992「坂田寺第7次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 22』
- 奈良国立文化財研究所 1993「坂田寺の調査（第8次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 23』
- 奈良国立文化財研究所 1994「左京十一條三坊（雷丘北方遺跡）の調査（第69-13・第71-8次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 24』
- 奈良国立文化財研究所 1995「左京十一條三坊（雷丘北方遺跡第4次）の調査（第71-13次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 25』
- 奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』
- 奈良文化財研究所 2006『吉備池廃寺発掘調査報告－百済大寺跡の調査－』
- 奈良文化財研究所 2010「桧隈寺周辺の調査－第159次」『奈良文化財研究所紀要 2010』
- 奈良国立文化財研究所 2017『飛鳥・藤原宮発掘調査報告V－藤原京左京六条三坊の調査－』
- 西川雄大 2005「飛鳥の坂田寺式軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅱ－山田寺式軒丸瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所
- 西口寿生 2002「奈良時代の坂田寺」『季刊明日香風 第84号』飛鳥保存財団
- 花谷 浩 2000a「京内廿四寺について」『研究論集XI』奈良国立文化財研究所
- 花谷 浩 2000b「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所
- 花谷 浩 2003「飛鳥寺院の奈良時代」『季刊明日香風 第86号』飛鳥保存財団
- 花谷 浩 2009「飛鳥の瓦と百済の瓦」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』
- 菱田哲郎 2005「古代日本における仏教の普及」『考古学研究 第52号第3号』考古学研究会
- 枚方市教育委員会 1997『九頭神遺跡－九頭神廃寺－』
- 福岡市教育委員会 1994『那珂 10』福山敏男 1934「飛鳥寺の創建に関する研究」『史学雑誌 45-10』史学会
- 藤岡穰ほか 2017「飛鳥寺本尊 銅造釈迦如来坐像（重要文化財）調査報告」『奈良国立博物館紀要 鹿園雑集 第19号』奈良国立博物館
- 水野清一 1949「飛鳥白鳳仏の系譜」『佛教藝術 第4号』毎日新聞社
- 向井佑介 2013「佛塔の中國的變容」『東方學報 88』京都大学
- 向井佑介 2019「中国における双塔伽藍の成立と展開」『古代寺院史研究』思文閣
- 森 郁夫 1998「伽藍配置変化の要因」『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局（初出 1991）
- 森郁夫・金誠亀 2008『日韓の瓦』帝塚山大学出版会
- 松原三郎 1971「飛鳥白鳳仏源流考一・二」『國華 931・932』
- 毛利 久 1978「三国彫刻と飛鳥彫刻」『百済文化と飛鳥文化』吉川弘文館
- 藪内五百樹 1993「興福寺の前身・山階寺と厩坂寺をめぐって」『佛教芸術 234号』毎日新聞社
- 吉田一彦 2012『日本書紀』仏教伝来記事の研究』『仏教伝来の研究』吉川弘文館
- 吉村 伶 1983『中国仏教図像の研究』東方書店

- 吉村 怜 1992 「日本早期仏教像における梁・百済様式の影響」『仏教藝術 201』毎日新聞社
- 吉村 怜 1995 「止利式仏像と南朝様式の関係－岡田健氏の批判に答えて－」『仏教藝術 219』毎日新聞社
- 李 成市 2000 『世界史リブレット7 東アジア文化圏の形成』山川出版社
- 李 成市 2010 「王興寺の建立と百済仏教－高句麗・新羅仏教との関係を中心に－」『古代東アジアの仏教と王権－王興寺から飛鳥寺へ－』勉誠出版
- 李 炳鎬 2015 「飛鳥寺三金堂と日本の初期寺院の源流」『百済寺院の展開と古代日本』塙書房
- 李タウン 1999 「百済の瓦からみた飛鳥時代初期の瓦について」『飛鳥・白鳳の瓦と土器－年代論－』帝塚山大学考古学研究所
歴史考古学研究会・古代の土器研究会

出典

- 第1図：古代瓦研究会 2000・2010・花谷 2000a を転載
- 第2図：奈文研 2006 を転載
- 第3図：筆者作成